

# 第16章 福島県立博物館

## 第1節 概要

### 1 運営の概要

福島県立博物館は資料収集・常設展・企画展・調査研究・教育普及事業を中心に内容の充実を図っている。

今年度の博物館の活動の概要は次のとおりである。

### 2 運営協議会

#### (1) 委員

学校教育	金子 美津子	いわき市立小名浜東小学校長
	三輪 晶子	郡山市立高瀬中学校長
	山内 正之	県立会津学鳳中学校・高等学校長
社会教育	遠藤 俊博	福島県文化振興財団理事長
	安部 慎一	二本松市生涯学習課長
学識経験者	一ノ瀬 美枝	会津若松市教育委員会委員
	佐藤 彌右衛門	合資会社 大和川酒造店代表社員
	長尾 修	公立大学法人会津大学短期大学部社会福祉学科 非常勤講師
	大友 靖子	家庭教育インストラクター連絡協議会 理事
	齋藤 陽子	公募委員

#### (2) 会議

ア 第1回	平成27年7月2日(木)
議題	①平成27年度事業について ②中期目標の達成状況について ④次期中期目標について ⑤入館者数の推移について
イ 第2回	平成28年3月7日(木)
議題	①平成27年度事業の実施状況について ②平成28年度事業計画について ③博物館の使命について(改正案) ④第2期中期目標について(中間修正案) ⑤平成28年度予算の概要について

## 第2節 調査研究事業

### 1 展示資料調査研究

将来の博物館リニューアルに向けて、新たな研究成果と展示資料の収集のため、考古・歴史・民俗・美術・自然の各分野がテーマを設定し、調査を実施している。平成27年度は、以下の3テーマで調査研究を進めることとした。

#### (1) 当館所蔵新生代植物化石の再評価

##### ア 趣旨

当館自然分野の収蔵資料のなかで最も重要なものの一つに鈴木敬治植物化石コレクションがある。このコレクションは(故)鈴木敬治福島大学名誉教授が当館に寄贈されたもので、その内容の大部分は福島県内産の新生代植物化石である。すでにこれらの標本の10,000点以上が鑑定、整理されてきたが、最近、産地・地質時代にまとまりのある標本に関して、

ボランティアの力を借りながら、新たに1,000点以上の整理を進めることができた。そこで、これらについて鑑定内容を確認した上で成果を論文として公表し、コレクション整理の成果をさらに充実させたい。

##### イ 概要

金山町猿倉沢地域ほかの地域で化石産地確認調査を行うとともに、付近の地質概要を把握する。また、すでに収蔵されている同地域の植物化石について、同定内容の再確認、標本写真撮影、未登録標本のラベリングおよび登録等を順次行い、展示公開や博物館紀要への執筆等により成果を公表する。

平成27年度は鑑定済み標本のリスト化を中心に室内作業を進めてきた。しかしながら、専門家による標本鑑定の継続実施については旅費の不足との理由で中止された。

#### (2) 会津藩社倉制の研究

##### ア 趣旨

江戸時代には備荒貯蓄や米価調整のため、各藩や代官所においてさまざまなシステムの構築が試みられた。その備荒貯蓄政策の代表的なものは会津藩の例で、保科正之がはじめた社倉や社跡米の制度である。この制度は藩政時代から全国的にも注目されたが、その詳細について、系統的な研究はあまり行われていない。よって各種文献の調査等を行い、制度の具体的なシステムについて明らかにすることを目指す。

##### イ 概要

社倉の運用方法などを示す具体的な基礎資料を調べる中で「社倉方一式」という資料の存在が判明した。この資料が会津藩の社倉米の制度やその配分を具体的に知ることに出来る貴重なものであったため、平成26年度には当館紀要上で、続けて平成27年度にはポイント展で調査の成果を発表し、本研究は一応の区切りとした。

#### (3) 山口弥一郎調査資料の研究

##### ア 趣旨

山口弥一郎(1902-2000)は旧・新鶴村に生まれ、東北の地理学・民俗学研究に多大な業績を残した。近年では東日本大震災を経て著書『津浪と村』(1943年刊)が復刊され、津波災害と集落移動に関する研究が全国的に注目を集めている。しかし、磐梯山慧日寺資料館(磐梯町)に一括して収蔵されている山口が残した調査ノートや写真、蔵書などは、体系的な整理や目録作成にまで至っていない。本研究では磐梯町の協力のもと、同資料の整理・調査を進めることで、山口弥一郎の調査研究を見直し、人文科学的側面からの災害研究の新しい方向性を探っていく。

##### イ 概要

磐梯町と福島県立博物館で昨年度に取り交わした協約書にもとづき、平成27年度は磐梯町所蔵の山口弥一郎旧蔵資料の借用と整理を開始した。調査ノートや文書類について標題・年代等を目録化し、また写真撮影等を進めている。

#### (4) 考古資料による原始・古代の画期の再検討

##### ア 趣旨

I 縄文時代後半期から弥生時代初頭とII古墳時代終末期から奈良時代(6世紀末～8世紀)の2つの時期を取り上げ、当館収蔵の当該期の考古資料を中心に取り上げ、資料の有する社会的背景を考察し、本県における原始・古代の時代変遷の画期を検討し考古地域史の確立を目指すものである

##### イ 概要

縄文時代では、南相馬市中才遺跡の晩期製塩土器を包含する土壌サンプルの水洗を行い、製塩手法や遺跡周辺環境に関わる微小巻貝類や製塩残滓類の抽出を目指した。正式な同定作業は未了であるが、肉眼観察では微小貝類は伴っていないようである。また同遺跡貯蔵穴堆積土に含まれる大型種子の同定を実施し、ニワトコ種子を検出した。古墳時代では日本列島北限資料として注目される中島村四穂田古墳出土短甲の塗膜分析結果を確認し、漆が塗布された資料であることが判明した。また福島市梅本古墳出土象嵌刀装具の分析を県ハイテクプラザの協力を得て実施し、素材に関する知見を得ている。

## 2 その他の調査研究事業

### (1) 古文書整理事業

古文書類の調査・研究は、福島県の歴史をさぐるために欠かせない。しかし古文書を歴史資料として活用するためには1点ずつ整理を行い、表題・年代・形態・法量・状態などのデータを採取した上で博物館資料として登録する必要がある。

このため、購入・寄贈・寄託などにより当館で受け入れた古文書の整理・登録作業を行っている。また古文書原本を状態よく保存し後世に伝えていくため、古文書をマイクロ撮影し、原本のかわりに閲覧用に提供している。

平成27年度は、前年度に引き続き松崎達夫家寄贈資料の整理を継続して実施したほか、近年受け入れた小口の整理・登録を行った。また整理済の未登録資料(佐藤正夫家寄託資料 松下眞紀家寄贈資料、築田家追加寄託資料など)のデータ整備・登録も合わせて行った。マイクロ撮影は、前年度に引き続き「築田家追加寄託資料」の撮影を行った。

## 第3節 資料収集事業

### 1 収集展示委員会

博物館の収集資料、企画展の計画等についての審議のため、12名の委員を委嘱している。

#### (1) 収集展示委員会委員

氏名	役職名	備考
有賀 祥隆	東北大学名誉教授	委員長
野沢 謙治	郡山女子大学短期大学部文化学教授	副委員長
入間田宣夫	一関市博物館館長	委員
大石 雅之	岩手県立博物館研究協力員、東北大学総合学術博物館協力研究員	委員
岡田 清一	東北福祉大学教授	委員

佐々木利和	北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員教授	委員
設楽 博己	東京大学大学院人文社会系研究科教授	委員
原田 一敏	東京芸術大学大学美術館教授	委員
三上 喜孝	国立歴史民俗博物館准教授	委員
村川 友彦	福島県史学会会長、元福島県歴史資料館課長	委員
柳田 俊雄	東北大学名誉教授、東北大学総合学術博物館協力研究員	委員
玉川 一郎	福島県考古学会会長	委員

### (2) 会議

ア 日時：平成28年2月4日(木)

イ 議題 ①平成27年度事業の実施概要について

②平成28年度事業計画について

③平成28年度の企画展等について

④開館30周年記念事業について

⑤その他

## 2 受贈・受託

### (1) 歴史資料

ア 受贈

板かるた等	10件	個人
板かるた(箱入)	1件	個人
絵はがき	118件	個人
会府世稿・蘆名家記録極楽寺本・暦	91件	個人
小学筆算例題 卷之上	1件	個人
刀(無銘)ほか	2件	個人
本郷焼壺ほか	8件	個人
青い目の人形・稚児人形・人形ケース	3件	個人
事変勃発前団入殖後の略歴ほか	2件	個人
石井研堂収集資料「皇室関係」ほか	104件	個人
石井研堂収集資料「天 翻刻 15枚」	15件	個人

イ 受託

御家中面々御救金一件書付	1件	個人
--------------	----	----

### (2) 美術資料

ア 受贈

桑漆絵重箱ほか	20件	個人
会津絵長手盆ほか	125件	個人
佐藤容斎筆「雛飾図」	1件	個人

イ 受託

日乃出図ほか	8件	個人
坂内文石筆 野宴図ほか	16件	個人
黒塗菊唐草蒔絵皿ほか	2件	個人
浦上春琴「山水図」	1件	個人
浦上春琴「白衣観音図」ほか	5件	個人

### (3) 民俗資料

ア 受贈

こけしおよび関連資料	104件	個人
------------	------	----

パラシュート生地のコート	1件	個人
踏み俵ほか	23件	個人
笹野一刀彫（お鷹ぼっぱ）	1件	個人
赤子頭巾・着物・襦袢・脚絆	4件	個人
筵織り機・脛巾・脛巾織りほか	6件	個人
ハケゴ	1件	個人
手動式洗濯機	1件	個人
婚礼儀式順序並二役付ほか	2件	個人
火鉢	1件	個人

#### (4) 考古資料

ア 受贈		
磨製石斧ほか	10件	個人

#### (5) 自然資料

ア 受贈		
柄窪層産植物化石ほか一式	1件	個人
現世貝類標本ほか	92件	個人
国内産化石標本	17件	個人
米国ワイオミング州産魚類化石	1件	個人

### 3 購入

#### (1) 考古資料

山王遺跡出土題箋軸木簡（レプリカ）	1件	
-------------------	----	--

#### (2) 自然資料

エディアカラ生物化石ほか	14件	
--------------	-----	--

#### (3) 図書資料

ア 一般図書		
歴史分野 13冊、民俗分野 23冊、美術分野 3冊、自然分野 100冊、保存分野 10冊、計 149冊		
イ 定期刊行物	32種類	

## 第4節 保存管理事業

### 1 資料の収蔵

#### (1) 博物館資料

資料受入れ時点における収蔵資料件数の、現在までの累計を示す。件数は概数であり、「一括」で受け入れた資料も1件と数える。

収蔵資料数 (平成28年3月31日現在)

分野	件数	内容
考古	20,408	土器・石器・金属器ほか
民俗	13,333	生活・生業・交通・信仰・芸能用具ほか
歴史	22,180	書籍・文書資料ほか
美術	6,426	絵画・彫刻・工芸資料ほか
自然	49,331	化石・岩石・鉱物ほか
合計	111,678	

#### (2) 図書および映像資料

ア 収蔵図書数 (平成28年3月31日現在)

考古分野：24,192冊 民俗分野：4,691冊  
 歴史分野：9,886冊 美術分野：3,842冊  
 自然分野：16,233冊 保存分野：1,671冊

その他：56,747冊 合計：117,262冊  
 イ 収蔵映像資料数（平成28年3月31日現在）  
 収蔵映像資料総数：1,370点

## 2 登録・整理

### (1) 資料管理システムの運用

平成25年度中に、それまでのサーバクライアント方式による資料管理システムに換えて、新たにASP方式の博物館資料管理専用システムである早稲田システム開発株式会社製 I.B. Museum SaaS を導入した。新システムは県教育委員会の FKS 回線を介してインターネットに接続した端末パソコンより使用するものとし、それまで使用してきた資料管理システム専用 LAN 回線は FKS 回線に一本化した。新システムでは多数のデータの一括登録や一括修正が可能となり、また、経年的なランニングコストが削減された。更に、インターネット上での資料情報の外部公開が可能となった。

本年度は、資料の登録および資料情報の外部公開においてシステムの本格的な運用を開始することを目的としたほか、継続してプログラムの初期不良の発見と修正に努めた。初期不良についてはかなり修正を進めたが、未だに修正完了に至っていない。それは旧システムの膨大な情報項目をすべて完全に移植したため項目の構成が煩雑となり、使用中に初めて発見される書式や登録方法の設定ミス等があるためである。また同様の理由から、項目を再構成しないと登録作業の煩雑さを解決できない部分が生じており、その一部は有償の改修が必要である。

### (2) 資料の登録・資料情報の外部公開

整理が終了した資料のデータを資料管理システムに入力し、資料の登録を行った。表中の数値は登録済み資料の件数を示す。また、システムの資料情報外部公開機能を使用し、インターネット上で公開する所蔵資料情報を新たに追加した。資料の登録数・外部公開数はいずれも平成27年度中期目標の評価指標を達成した。ただ、資料情報の外部公開において検索機能をより使いやすく改良することが望まれるが、システムがASP方式であるため実施可能な修正に制限があり、今後、相当の工夫と時間が必要である。

登録資料数および資料情報の外部公開数を示す。

(平成28年3月31日現在)

分野	登録資料 (平成27年度)	登録資料 (累計)	資料情報 の外部公開 (平成 27年度)	資料情報 の外部公開 (累計)
考古	169	11,818	1,309	1,762
民俗	203	13,813	1,364	1,381
歴史	4,165	40,758	1,277	4,776
美術	5	6,224	0	23
自然	228	24,487	2,905	6,644
合計	4,770	97,100	6,855	14,586

### (3) ボランティア

博物館資料の整理のため、次の通り資料整理ボランティアを受け入れ、資料の整理を行った。

#### ア 自然資料整理

桑原 功 鈴木敬治氏寄贈資料中の調査露頭写真の整理  
延べ31日

星総一郎 星総一郎氏寄贈化石標本の整理 延べ10日

#### イ 古文書整理

古文書整理ボランティア登録者のうち12名が延べ68日参加し、松崎達夫家文書の整理事業（表題・年代・法量などのデータ採取）を行った。終了したのは279点。参加者は五十嵐晴日子、大堀義子、小熊和子、川原太郎、菊池フミ子、小関栄助、小檜山裕三、佐藤敏子、佐野喜惣次、鈴木清二、馬場純、星弘明の諸氏。

## 3 保存

### (1) 防虫作業等

#### ア 保存環境調査

常設展示室・収蔵資料展示室・企画展示室、収蔵庫

## 4 貸出

### (1) 博物館資料

資料名	貸出先	貸出期間	展覧会名
鈴木敬治コレクション植物化石標本 16点 福島県内産動物化石標本 7点 福島県内産動物化石標本（当館受託資料） 15点 フタバリュウ左脛骨標本（複製） 1点	国立科学博物館	平成27年6月26日～8月31日	福島県文化センターコラ ボミュージアム展示
安張遺跡出土 石棒 1点 上ノ台遺跡出土 石冠 1点	奥会津博物館	平成27年7月1日～10月10日	企画展「奥会津の縄文時代—縄文人からのメッセージ—」
和田の大仏出土 千体物片 26点 伝塚畑古墳出土 形象埴輪片 9点 大仏古墳群出土 玉類 4点 大仏15号墳出土 金銅製馬具 8点 跡見塚古墳群出土 銅釧・耳環 4点 出土地不詳 勾玉・ガラス玉 4点	須賀川市立博物館	平成27年7月11日～9月20日	企画展「ハックツ！すかがわ 考古学の世界」
泰西王侯騎馬図屏風（複製）動図・静図 豊臣秀吉朱印状（蒲生源左衛門尉あて） 1幅 九戸出陣陣立書 1幅 蒲生記（乾坤） 2冊	若松城天守閣郷土博物館	平成27年9月上旬～11月30日	企画展「築城者 蒲生氏郷」
稲荷塚遺跡1号竪穴出土 壺 1点（当館受託資料） 稲荷塚遺跡1号竪穴出土 器台 1点（当館受託資料） 稲荷塚遺跡1号竪穴出土 甕 1点（当館受託資料）	新潟市文化財センター	平成27年9月24日～平成28年1月22日	企画展「邪馬台国の時代1—東北南部（会津）の世界—」
蒲生氏郷法度条目 1幅 火事頭巾 1領 旗 1流	三春町歴史民俗資料館	平成27年10月1日～12月2日	特別展「蒲生氏の時代」

（一時、第1～第6収蔵庫）、エントランスホール、体験学習室、講堂、事務室、会議室、研究室、図書室、空調機械室など主要なスペースについて昆虫、室内塵埃中昆虫、空中浮遊菌、空中浮遊塵埃数、気相（アルカリガス定性、ホルムアルデヒド、酢酸、アンモニアの気中濃度）及び温度、湿度、照度等について調査を行った。

調査は季節による生息害虫等の状況を確認するため、7月28日～8月21日、11月4日～11月27日の2回にわたり実施した。

### イ 燻蒸庫による燻蒸

新収蔵資料および企画展出品資料などを中心に約589件の資料を専門業者の設備に持ち込み、2月2日～9日に燻蒸を実施した。

蒲生家系図 1冊			
中島村四穂田古墳出土短甲復元模型 1点	(公財)郡山市文化・学 び振興公社文化財調査 研究センター	平成28年1月14日～平 成28年2月2日	企画展「古墳時代の郡山は どこまで分かったか—土 器・墓・ムラから探る—」
天保雛一式 5箱 (当館受託資料)	かわまたおりもの展示 館	平成28年1月15日～平 成28年4月30日	「ひな人形展」
谷文晁筆「赤壁図」 白雲筆「窮玄掌覧」(当館受託資料) 白雲他筆「三松亭書画卷」(当館受託資料) 松平定信筆「詠帰亭」(当館受託資料) 宿札「白川少将宿」(当館受託資料)	白河集古苑	平成28年1月25日～平 成28年3月下旬	特別企画展「松平定信とそ の時代—藩主定信をめぐ る人とモノ—」
富作遺跡出土縄文土器(深鉢) 3点 狸森遺跡出土縄文土器(深鉢) 1点	福島県文化財センター 白河館	平成28年2月9日～平 成28年5月22日	企画展「縄文土器の年代— その古さを読み解く—」
ハドロサウルス類(ヒロノリュウ)の頸椎 1点 ハドロサウルス類(ヒロノリュウ)の歯 1点	国立科学博物館	平成28年2月22日～平 成28年6月20日	「恐竜博2016」
雪村筆「蕭湘八景図帖」 1帖(当館受託 資料)	京都国立博物館 東京 国立博物館	平成28年3月中旬～平 成28年12月中旬	臨済禅師1150年・白隠禅 師250年遠諱記念「禅一心 をかたち—to」展
十二天図(恵日寺旧蔵)旧軸木2本(修復 銘有) ①正徳五年銘 ②正徳六年銘	磐梯町磐梯山恵日寺資 料館	平成28年3月25日～平 成28年12月2日	常設展

## (2) 写真資料

総数：106件 195点

考古：16件 43点 民俗：6件 14点 歴史：58件 108点 美術：22件 26点 自然：4件 4点

## 第5節 展示事業

### 1 常設展示

総合展示と部門展示からなる。総合展示は、原始から現代までの福島県の歴史を通観し、人々の暮らしを時系列に沿って展示している。原始・古代・中世・近世・近現代・自然と人間の6つのテーマで構成される。部門展示は、テーマ性の高い専門的な展示であり、民俗・自然・考古・歴史美術の展示に分かれる。

平成21年度から、常設展示室内において、以下のようなテーマ展・ポイント展を実施している。

#### (1) テーマ展

常設展エリア内において、特定のテーマを設定した小・中規模展示を「テーマ展」として実施した。本年度が7年目である。全7回実施。

ア「ふるさとの考古資料5【富岡町】遺跡探訪」(部門：考古展示室)平成26年度～平成27年5月10日(日)

イ「内藤コレクション寄贈記念 中里壽作品展—自然へのまなざし—」(部門：歴史・美術展示室)4月25日(土)～6月21日(日)

ウ「ふるさとの考古資料6【飯館村】遺跡探訪」(部門：考古展示室)6月20日(土)～平成28年5月8日(日)

エ「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト成果展」(部門：歴史・美術展示室)7月4日(土)～8月30日(日)

オ「現代「漆・歴史」考2015—吾子可苗×富樫孝男 漆の記憶展—」(部門：歴史・美術展示室)9月5日(土)～11月1日(日)

カ「けんぱくの宝2015」(部門：歴史・美術展示室)11月14日(土)～平成28年1月24日(日)

キ「建具指物師の仕事(わざ)—木村徳治展—」(部門：歴史・美術展示室)平成28年2月6日(土)～3月27日(日)

#### (2) ポイント展

常設展エリア内において、特定資料の公開を目的とした小規模展示を「ポイント展」として実施した。本年度が7年目である。全22回実施。

ア「喜多方市泉福寺の大日如来像」(総合：古代展示室)4月14日(火)～5月10日(日)

イ「蒲生氏郷像」(総合：近世展示室)4月14日(火)～5月10日(日)

ウ「会津恵日寺の宝物」(総合：中世展示室)4月14日(火)

～6月7日（日）  
 エ「近世に書かれた中世の城絵図」（総合：中世展示室）4月14日（火）～6月7日（日）  
 オ「松平定信像」（総合：近世展示室）4月14日（火）～6月7日（日）  
 カ「戊辰戦記絵巻物」（総合：近・現代展示室）4月14日（火）～6月7日（日）  
 キ「万祝(まいわい)―大漁の祝い着―」（部門：民俗展示室）4月17日（金）～6月10日（水）  
 ク「まぼろしの土人形―根子町人形―」（部門：民俗展示室）6月12日（金）～8月12日（水）  
 ケ「会津藩の社倉」（総合：近世展示室）7月18日（土）～8月21日（金）  
 コ「天明飢饉の図」（総合：近世展示室）7月18日（土）～8月21日（金）  
 サ「若松歩兵連隊」（総合：近・現代展示室）7月18日（土）～8月21日（金）  
 シ「猪苗代のオシンメイサマ」（部門：民俗展示室）8月14日（金）～9月30日（水）  
 ス「明治人の手紙―旧会津藩関係者の足跡」（総合：近・現代展示室）8月22日（土）～9月25日（金）  
 セ「農鍛冶の仕事と道具―山口栄吾コレクション―」（部門：民俗展示室）10月2日（金）～12月2日（水）  
 タ「藤井康文 恐竜イラスト原画展」（エントランスホール）10月3日（土）～11月15日（日）  
 チ「石器に用いられた石」（総合：原始展示室）11月5日（木）～平成28年3月13日（日）  
 ツ「縄文時代の植物利用―三島町荒屋敷遺跡の植物素材製品―」（総合：原始展示室）11月17日（火）～平成28年3月13日（日）  
 テ「弥生時代の骨角器」（総合：原始展示室）11月17日（火）～平成28年3月13日（日）  
 ト「郡役所のお仕事」（総合：古代展示室）11月25日（水）～平成28年3月13日（日）  
 ナ「むかしの道具―洗たくとアイロンがけ―」（部門：民俗展示室）12月4日（金）～平成28年3月23日（水）  
 ニ「地質図を読もう」（エントランスホール）平成28年1月22日（金）～2月28日（日）  
 ノ「会津盆地の土地利用」（総合：自然展示室）平成28年2月18日（木）～3月31日（木）

## 2 企画展示

歴史・美術・民俗・考古・自然の各分野が単独もしくは協力し企画した館のオリジナルなテーマに基づいた展示を中心に、期間を限定して開催している。

### （1）夏の企画展「被災地からの考古学1―福島県浜通り地方の原始・古代」

ア 会 期：平成27年7月18日（土）～9月13日（日）

開館日数：58日間

イ 会 場：福島県立博物館企画展示室

ウ 入館者数：2,140人  
 エ 担当学芸員：考古分野：荒木 隆  
 オ 趣 旨

本展は東日本大震災で大きな被害を受けた浜通り地方に焦点を当て、浜通り地方が東北地方の歴史の中で果たしてきた役割について考古資料から振り返るものであった。常磐高速道路及び各種復興調査の成果をもとに新しい浜通り像を明らかにしていくことを中心に浜通り地方に対する認識を新たにするとともに、浜通り地方の復興に向けた取り組みについても注目していくものであった。

今回の展示を通して、本県浜通り地方が東北と関東、さらに中部、関西地方まで幅広い交流を行ってきたことや、奈良時代以降の東北地方開発の拠点として福島県浜通り地方が重要拠点として中央政府から認識され、各種の先端技術がいち早く導入された点などを明らかにすることができた。

本展は日本芸術振興会の芸術文化振興基金からの助成を受けて実施しており、福島県立博物館の展示終了後、いわき市考古資料館と南相馬市博物館を巡回している。

### カ 展示構成

プロローグ 浜通り地方って、どんな所？

第1部 常磐道で行く浜通り遺跡の旅発見！―常磐道建設で目覚めた遺跡が語る浜通りの歴史―

第2部 浜通り地方 復興調査で大発見！―発掘した面積は小さいけれど、こんなことも分かったよ―

第3部 浜通り地方市町村 ふるさとお宝自慢！―発掘調査でよみがえった各市町村自慢の出土品たち―

第4部 ふるさとの顔 浜通り地方の顔 大集合！―縄文時代から平安時代までの顔・顔・顔 オンパレード―

第5部 浜通り地方の復興に向けて―被災した文化財の復旧と文化財レスキュー事業―

キ 展示資料総数 322点

ク 主な展示資料

旧石器時代：三貫地貝塚出土石器（新地町）

縄文時代：浦尻貝塚出土骨角器（南相馬市）

田子平遺跡出土土面（浪江町）

弥生時代：美シ森遺跡出土土器（楡葉町）

古墳時代：丸塚古墳出土埴輪（相馬市）

清戸迫横穴出土須恵器（双葉町）

飛鳥時代：棚和古古墳出土須恵器（大熊町）

奈良時代：桜田IV遺跡出土土師器（広野町）

小浜代遺跡出土瓦（富岡町）

平安時代：横手廃寺跡出土瓦（南相馬市）

ケ 関連行事

①企画展記念講演会（4回）

第1回「ふくしま復興調査元年」

日 時：7月25日（土）13時30分～15時00分

会 場：福島県立博物館講堂

講 師：兵庫県考古博物館 山本誠氏

第2回「復興調査最前線1 派遣職員が見たふくしまの遺跡」

日時：8月8日(土)13時30分～15時00分

会場：福島県立博物館講堂

講師：京都府教育委員会文化財保護課 中居和志氏  
公益財団法人山形県埋蔵文化財センター 天本昌希氏  
第3回「浜通り地方から福島県の歴史を読み解く」

日時：8月15日(土)13時30分～15時00分

会場：福島県立博物館講堂

講師：当館学芸員 荒木隆

第4回「復興調査最前線2 市町村教育委員会の調査から」

日時：9月5日(土)13時30分～15時00分

会場：福島県立博物館講堂

講師：公益財団法人いわき市教育文化事業団 木幡成雄  
南相馬市教育委員会文化財課 荒淑人

## ②企画展解説会(17回)

日時：7月18日(土)・19日(日)・20日(月)・25日(土)  
・26日(日)、8月2日(日)・8日(土)・9日(日)・15日(土)  
・16日(日)・21日(金)・23日(日)・30日(日)  
、9月5日(土)・6日(日)・12日(土)・13日(日)

場所：福島県立博物館企画展示室

## ③オリジナルグッズ製作ミステリー体験

日時：7月19日(日)・26日(日)・8月2日(日)・9日(日)  
・16日(日)・23日(日)・30日(日)・9月6日(日)

場所：福島県立博物館企画展示室

## コ 成果と課題

・現在、東日本大震災の復興を進めている浜通り地方についての歴史的理解が深まり、県内だけでなく県外の来館者に対しても、浜通り地方で行われている復興事業に関わる発掘調査の状況や文化財レスキュー事業について情報発信することができた。

・企画展終了後、浜通り地方のいわき市と南相馬市を会場に展示内容をコンパクトにした移動展を実施したが、中通り地方で開催することができなかった。また、県外、特に福島県から避難している住民が多い首都圏の都県立博物館で巡回展示を行い、福島県の復興の様子を積極的に情報発信する機会を設ける計画も企画当初があったが、予算的な制約の中で実現できなかった。別な機会を利用しながら、福島県の現状を県外に発信する事業についても検討していきたい。

## (2) 秋の企画展「相馬中村藩の人びと」

ア 会期：平成27年10月10日(土)～11月29日(日) 開館日数：44日間

イ 会場：福島県立博物館企画展示室

ウ 入館者数：1808人

エ 担当学芸員：歴史分野：高橋充他

## オ 趣旨

福島県の相双地域では、江戸時代に相馬家を藩主とする中村藩の時代が約250年間続いた。鎌倉時代以来続く相馬氏の系図、江戸時代に描かれた野馬追絵巻や城下絵図、藩士の家系に伝えられた古文書や、製陶・製塩に関する資料、寺社に伝えられた宝物などを展示公開した。この地域は、東日本大震

災によって大きな被害を受けてしまった。救出された資料も展示しながら、先人たちの歩みをふり返ることで、復旧・復興を少しでも後押しできることを意図して企画した。

## カ 展示構成

プロローグ 相馬家と中村藩

第1章 旅人の見た相馬の風景

第2章 さまざまな仕事と暮らし

第3章 祈りの姿

キ 展示資料総数 113件(会期中に展示替えあり)

## ク おもな展示資料

○野馬追絵巻(相馬市教育委員会蔵)

○料理伝書・折形(双葉町教育委員会蔵・当館寄託)

○大堀相馬焼(福島県文化財センター白河館蔵)

○相馬家婚礼道具(同慶寺蔵・当館寄託)

○両界種子曼荼羅(大聖寺蔵・当館寄託)

## ケ 関連行事

記念講演会「相馬中村藩の成立と家格形成」

日時：10月17日(土)13:30～15:00

会場：当館講堂

講師：東北福祉大学教授 岡田清一氏

関連講座「御料理方に学ぶ!江戸時代の料理作法―折形を折ってみよう」

日時：10月31日(土)13:30～15:00

会場：当館実習室

講師：食文化研究家 平出美穂子氏

## 展示解説会

日時：10月10日(土) 11月7日(土)・14日(土)・19日(木)・21日(土)・26日(木)・28日(土) 各回とも13:30～14:30

会場：当館企画展示室

講師：当館学芸員 高橋充

## コ 成果と課題

浜通り地域の歴史とくに近世の歴史をテーマにした初めての企画展となった。展示構成の工夫のひとつとして、第1章では実在した会津から相馬への旅行記(紀行文)「目さめ日記」の内容に沿って、野馬追に関する絵画資料や海岸部・中村城下の絵地図を配置し、羅列的になりがちな展示にストーリー性を持たせようと試みた。また、浜通り地域とはゆかりの少ない会津地域の方々にも興味をもってもらい、両者を結びつける視点を提供しようとした。アンケートの感想などをみると、「目さめ日記」や野馬追絵巻に興味をもった来館者が多く、一定の効果はあったと思われる。ただし、紀行文の内容の説明などが足りず、物足りなさを感じるという意見もあった。

アンケートの集計によると、相双地域からの来館者の割合が37%と高く、とくに地元の方々に観覧していただきたいという意図は、ある程度伝わった。会津若松市に避難している大熊町の町民の方々には、チラシを全戸に配布するような取り組みも一定の効果があった。一方で、会津若松市内など通常の企画展で割合の高い地域からの来館者は少なかった(若松市内は16

%)。入館者全体数が低迷した原因も、そのあたりに求められる。相双地域の歴史の魅力を、その他の地域の方々にも伝えられるように十分に内容を掘り下げられなかった点が、最大の反省点である。

### 3 特集展

特集展は、新しく収集した寄贈・寄託資料を中心に、特定のテーマに基づいて一定の期間開催する展示会であるが、特に予算化せず常設展費の予算の枠内でやりくりした。

#### (1) 「震災遺産を考えるーガレキから我歴へ」

ア 会 期：平成27年2月11日(木・祝)～3月21日(月・祝)

イ 会 場：エントランスホール・企画展示室

ウ 観覧者数：4,450人

エ 担当学芸員 高橋満・金澤文利

オ 主 催：ふくしま震災遺産保全プロジェクト実行委員会

共 催：東北大学学術資源研究公開センター

東北大学災害科学国際研究所

東北大学グローバル安全学トップリーダー育成プログラム

カ 趣 旨

ふくしま震災遺産保全プロジェクトでは、東日本大震災を歴史と位置づけること、歴史として共有し、未来に伝えることを目指している。そのためにはまず「福島県に何が起きたのか?」「福島県に何が生じたのか?」を明らかにすることを出発点として、それらが産み出された背景や要因を探っていく必要があると考えている。

震災で福島県に起きたこと、すなわち「ふくしまの経験」を示す歴史的資料として、私たちは震災が産み出したモノ・震災を示すパシヨに着目し、これを「震災遺産」と呼んでいる。福島県における本震災には、地震・津波・原子力発電所事故が与えたダメージと、これに対応した救助・避難・支援・除染などの様々な局面があり、この局面ごとにあるいは局面が重なって多量の瓦礫、広域に分布する仮設住宅団地、除染物質の広大な集積など非日常の光景が震災から5年の今も産み出されている。

本プロジェクトでは、震災遺産が震災の経験だけでなく震災前まであった人々の生活や日常を伝える手段になると考え平成26年度からフィールド調査や資料を収集・保全する取り組みを開始した。

本特集展は福島県立博物館に実行委員会事務局を置く、ふくしま震災遺産保全プロジェクトのアウトリーチ事業「震災遺産を考えるⅡ」会津セッションを構成するプログラムの一つとして開催した。震災遺産の調査・収集活動やその成果を収集資料や写真パネルで紹介し、震災の多様性を震災遺産から考え、震災から5年のふくしまを振り返るとともにプロジェクトのこれまでの活動を県民や広く一般に紹介する機会とする。

キ 構 成

1 あの日・あの時から一揺れる大地・迫る海・崩壊した「安全」

・2011年3月11日からの5年間に発生した出来事を、象徴的な震災遺産の展示から振り返る。

2 「避難」の多様性

・一次避難所。「一日だけの避難所」などふくしま特有の避難生活を避難所資料から考える。

3 断絶する「日常」-学校・生活・仕事

・震災や原発事故で断絶する日常を被災地に残されたままとなった器物から回復しない「日常」を紹介する。

4 思いがけない「未来」

・震災によって、新たに生み出されたものから福島県の特殊性を考える。

ク 主な展示資料

・震災の時刻で止まった時計 (富岡・いわき)

・震災当日の新聞が入ったままの自動販売機 (浪江)

・津波で曲がった橋の欄干 (いわき)

・活断層剥ぎ取り標本 (いわき)

・火事で溶けた街灯 (いわき)

・避難誘導したパトカーの部品 (富岡)

・配達されなかった新聞包み (浪江)

・被災地名を示す道路標識 (南相馬・浪江)

・避難所で使われたロウソク (富岡)

・非常用飲料水 (双葉)

・安定ヨウ素剤 (富岡)

・横断幕「富岡は負けん！」 (富岡)

ケ 関連事業

#### ① 「3Dデジタル震災遺構アーカイブ体験」

東北大学と連携して平成26年度から開始した県内所在震災遺構の3Dポイントクラウドデータ取得によるデジタル記録保存事業の成果を県内で初公開する事業である。企画展示室内のブースに東北大学の機器とマーカーを設置し、県内の「震災遺構」を最新技術MR(複合現実Mixed Realityの略、複合現実：仮想現実と現実世界をリアルタイムで融合させる技術)による3次元バーチャル映像としてヘッドマウントディスプレイで閲覧する催しを会期中実施した。参加者は1,531名である。

#### ② 展示解説会

会期中に15回開催した。参加者は164名である。

### 4 移動展

#### (1)美術館移動展「写真展 東北一風土・人・暮らし」

ア 会 期 平成27年5月2日(土)～6月21日(日) 開館

日数：44日間

イ 会 場 福島県立博物館企画展示室

ウ 入館者数 5,992人

エ 担当学芸員 美術分野：川延安直・小林めぐみ

オ 趣 旨

2014年に開館30周年を迎えた、福島市にある福島県立美術館は、近現代の欧米・日本の美術と県出身作家の作品を中心に、3,000点以上の美術品を収蔵している。これらの収蔵作品を県内各地で気軽に鑑賞してもらおうと、当館にて会津出身・



ゆかりの画家たちの名品展を開催した。長い歴史を刻んできた会津地方では、美術愛好家の惜しめない支援もあり、美術を育む風土が近代以降も脈々と息づいている。こうして、日本画では湯田玉水、坂内青嵐、酒井三良など、水彩画では相田直彦、春日部たすく、渡部菊二など、個性あふれる画家たちを輩出した。さらに、会津坂下町出身の斎藤清は、会津の風景を独自の造形感覚で表現し、戦後日本を代表する版画家となった。本展覧会は、会津の画家たちによる多彩な近代美術の魅力を、約50点の日本画、水彩画、版画により探り、豊かな風土が育んだ会津文化の広がりを紹介した。

#### カ 展示構成

会津出身・ゆかりの15作家、出品点数61点

日本画：小川芋銭<sup>うせん</sup>・湯田玉水・坂内青嵐<sup>せいめい</sup>・猪巻清明<sup>せいまい</sup>・酒井三良<sup>はくちょう</sup>・酒井白澄<sup>はくちょう</sup>・菊地養之助

水彩画：相田直彦・赤城泰舒<sup>やすのぶ</sup>・春日部たすく・渡部菊二・百合子・長沢節

版画：森田恒友・斎藤清

#### キ 関連事業

公開対談「喜多方美術倶楽部」をめぐって」

講師：後藤學（喜多方市美術館館長）×増淵鏡子（福島県立美術館学芸員）

日時：6月6日（土）13時30分～15時

会場：企画展示室

ギャラリートーク第1回

講師：早川博明（福島県立美術館館長）

日時：5月2日（土）13時30分～14時30分

会場：企画展示室

ギャラリートーク第2回

講師：坂本篤史・白木ゆう美（福島県立美術館学芸員）

日時：5月16日（土）13時30分～14時30分

会場：企画展示室

ギャラリートーク第3回

講師：堀宜雄（福島県立美術館学芸員）

日時：6月21日（日）13時30分～14時30分

#### ク 成果と課題

多くの美術家を輩出しながら、美術館のない会津若松市においてまとまった点数の会津ゆかりの画家の作品を紹介できた。この点に対して、来館者の評価は高かったように思われる。県立美術館との連携によりこうした移動展の定期的な開催方法を検討できないだろうか。

県立博物館の企画展の一部や、当館の収蔵品を市町村の博物館・資料館で公開して欲しいという要望も多いため移動展を実施してきた。本年度は三春町歴史民俗資料館より、これまでに実施したことのない自然史系の展覧会を開催したいとの要望があった。また県立図書館より、「県立図書館連携事業」への協力を要請された。これらの要望に対して本年度は自然分野が対応し、以下の通り2本の移動展を実施した。

#### （2）移動展「見る・さわる 世界の化石」

ア 会期：平成27年7月18日（土）～8月30日（日）

イ 会場：三春町歴史民俗資料館企画展示室

ウ 入館者数：757人

エ 担当学芸員：相田優、香内修、猪瀬弘瑛、竹谷陽二郎

オ 趣旨：

この移動展は、当館が主に県内の博物館・資料館等と共催して実施するためにパッケージとして用意し、各館・施設等に開催を募っている企画の一つである。今回は三春町歴史民俗資料館との共催展として実施した。

内容的には、当館が所蔵する世界の化石標本に基づき、生物の歴史と化石の楽しさを紹介する展示である。世界各地・各時代の代表的な化石により、生物の進化と多様性、地球の歴史を知ることができる構成となっている。今回は、福島県から産出した各時代の化石もいくらか紹介することとした。また、化石を手にとってその感触を肌で感じ取ってもらうため、化石にさわれるコーナーをかなり広く設置した。

#### カ 展示構成

1. 古生代の生き物たち —生物の爆発的発展—
2. 中生代の生き物たち —アンモナイトと恐竜—
3. 新生代の生き物たち —哺乳類の繁栄—
4. 化石にさわってみよう

キ 展示資料総数：約400点

#### ク 主な展示資料

リンボク、グロッソプテリス、四放サンゴ、腕足類、ウミユリ、ウミサソリ、甲冑魚、オウムガイ類、アンモナイト類、硬骨魚類、始祖鳥、カセキイチョウ、プロトケラトプス頭骨、ステゴロフォドンゾウ下顎骨、マンモスの牙、サーベルタイガー頭骨、他

#### ケ 関連行事

##### ①展示解説会

日時：平成27年7月18日（土）13:30～14:30

場所：三春町歴史民俗資料館企画展示室

講師：福島県立博物館学芸員

##### ②実技講座「化石標本をつくろう」

日時：平成27年7月25日（土）13:30～15:30

場所：三春町さくら湖自然観察ステーション研修室（三春町大字西方字石畑270-1）

講師：福島県立博物館学芸員

#### コ 成果と課題

・開催館の企画展示室が広めだったので、かなり充実した展示を構成することができた。また、広報宣伝や展示作業を始めとして、移動展の実施全般に関して開催館との緊密な協力体制を築くことができたため、企画段階から展示撤収までスムーズに運営することができた。

・スムーズな運営と裏腹に、入館者数は思いのほか伸びなかった。「見る・さわる 世界の化石」はこれまでに数回開催しているが、入館者数はいずれも1,000人をはるかに越えており、初回の旧梁川町ではパレオパラドキシア同時展示の効果もあったとはいえ4,000人以上の入館者を迎えている。入

館者が1,000人に満たなかったのは今回が初めてである。

・開催館が展示会場脇の休憩室にアンケートを設置したが、会期中の回答数自体が著しく少なく（10数枚）、しかもそのほとんどは周辺市町からの来館者による回答だった。したがってアンケートからは入館者が少ない原因を読み取ることができなかった。

・推測に過ぎないが、入館者が少なかった原因の一つとして、三春町が全町域に渡りほぼ化石が産出しない土地柄であるため、化石や古生物に興味を持ったことのある人口が少ないのではないかという点が挙げられる。他に、若年層の人口減少が思い当たる。

### （3）移動展「藤井康文 恐竜イラスト原画展」

ア 会 期：平成27年12月4日（金）～平成28年1月6日（水）

イ 会 場：県立図書館展示コーナー（無料）

ウ 入館者数：1,015人

エ 担当学芸員 相田優、香内修、猪瀬弘瑛、竹谷陽二郎  
オ 趣 旨

本年度当初より、県立図書館から「県立図書館連携事業」への協力を要請されていた。これに対して、本年度当館で実施するポイント展「藤井康文 恐竜イラスト原画展」を図書館でも実施することを予定していた。その後、この展示を「県立博物館移動展」と銘打ちたいとの希望が図書館より寄せられたため館内で協議した結果、正式に当館の「移動展」扱いとして開催することとした。

カ 展示内容

著名な科学イラストレーターである藤井康文氏が当館に寄贈して下さった11点の恐竜イラストと、関連する標本を展示紹介する。

キ 主な展示資料

- ・恐竜イラスト 11点
- ・関連標本 5点

ク 成果と課題

・観覧者数は図書館側が人員を配置しカウンターで計数した。その結果、短い会期にもかかわらず千人以上の観覧者があったことが判明した。展示は評判が良かったようだとの感想が、図書館側担当者から聞かれた。

・図書館側では、イラストの展示と連動させて恐竜・古生物などの図鑑類、書籍などを展示しており、図書館でのコラボレーション事業として展示がうまく機能したと考えられる。  
・図書館の展示コーナーはトピック展示を行うための小さなスペースであり、ストーリーのある展示はできない。そのため、今後も同様の連携を行う場合、取り上げることが可能なテーマはかなり制限されることに留意する必要がある。

## 5 指定文化財の公開

本館の展示で以下の指定文化財の公開を行った。（館蔵・寄託品などは除く）。

### （1）国指定

該当なし

### （2）県指定（福島県指定）

〈県重有民〉「旧修験岩崎家所蔵修験資料」のうち  
9点（福島県相馬市 個人）

企画展「相馬中村藩の人びと」展示公開

## 6 展示解説

### （1）展示解説員

平成26年度の展示解説員は13名で、前年度と変わらなかった。これに加えて前年度と同様に常設展示室内で2名分の監視員を委託できる予算を確保したが、展示解説員の増員を図ることができなかった。企画展についても、展示予算の中で監視員1名を予算化し、通常の展示解説員1名に監視員1名を交えた体制で展示室の対応をせざるをえない状況であった。

さらに、企画展開催時には企画展示室の入口のモギリに人数を割かれるなどするため、常設展示室内に対応できる人員が不足する状況が恒常的に続いている。これらの状況に対して、学芸員による解説活動を増やし、定数減の状況を乗り切る対策をとっている。

このような展示解説員の減員により、過去に実施されていた解説員が主となる講座などは、今年度も実施できない状況であった。

また、展示解説員は来館者に展示を解説・案内することが第一の役割であるが、定数減により展示解説員1人で対応しなければならぬエリアが広がった関係で十分な解説活動ができない場合が少なく、最低限の監視業務を行うので精一杯の状況であることが多かった。きめ細やかな展示解説活動をはじめとしたより質の高い行政サービスを保障するために展示解説員に対する研修を実施するなど、質的向上に向けた努力を行っているが、展示解説員の人数不足という量的課題については、引き続き検討をしていく必要がある。

展示解説員の業務は、総合ガイダンスと名付けられた受付での来館者への対応をはじめとして展示や館内の業務をよく知っている職員でなければ担当できない内容がほとんどである。現在の減員状況の中でどうか対応している状況であるが、現在の定数では通常業務を実施する上では限界の状態であり、来館者への解説サービスを考えた場合、定数増が図られなければ、本来の業務にも支障を来す可能性が出てくる。

ア やさしい展示解説

展示解説員による常設展の定時解説で、原則的に他の行事の入っていない土曜と日曜日の午前11時、午後2時の2回開催を基本に実施している。1回の所要時間は約30分。今年度のやさしい展示解説は5月16日から3月26日の期間実施した。

実施状況：実施日数：90日 総参加人数：110人

イ 通し解説

非定期的に行われる常設展・企画展の解説。主として来館の個人・団体の要望に応じて展示解説員1名が全体を解説するもの。解説員の減員のため、通し解説は困難になってきているが、予約の団体の要望にこたえる形で実施してきていることが多い。

実施回数：40回

## ウ 部屋送り解説

非定期の常設展・企画展の解説。主として来館する個人の要望に応じ、各展示室の担当として立っている解説員が順に引き継いで解説する。

実施回数：49回

## エ 体験講座

体験講座などの解説員が主体となって実施する講座は、解説員業務に比して人数が少ないために平成26年度も実施されなかった。

ただし、七夕の時期には竹飾り、クリスマスには手製のクリスマスツリー、小正月に合わせての団子飾り、ひな祭りの時期に自作の雛人形の段飾りなど、解説員が自分たちで作ったものを体験学習室内に展示することは継続している。

また、ゴールドデンウィークを中心に時代衣装の試着体験に加え、期間限定で甲冑の試着体験も行うなど、体験的な活動の充実を図っている。

## (2) 学芸員

企画展および特集展の開催中は展示解説のために職員を配置する場が増えることになり、展示解説員だけでは解説員の昼休みや休憩時間の減員に対応できない状況であるため、学芸員が代わって展示室に立つことになっている。原則1コマ45分である。27年度は年間で308回を数えた。学芸員が展示室に立つことは単なる解説員の肩代わりではなく、実際に展示室に立つことにより得るもの、気づくものが多かったが、通常業務とのバランスの点で今後の検討が必要である。

また、企画展、テーマ展、特集展については、公民館、研究団体などからの依頼に応じて、担当分野の学芸員が展示解説を実施した。

## (3) 展示解説のための印刷物

ア 福島県立博物館常設展示解説図録

常設展の解説図録。昭和61年初版発行。106 p.

イ 福島県立博物館ガイドブック

常設展の展示内容をコンパクトに解説。裏方の館活動も紹介。昭和61年発行。28 p.

ウ Fukushima Museum Permanent Exhibition Guide Book

英文展示解説パンフレット。希望する来館者に無償配布。平成18年発行。14 p.

## 7 体験学習室

エントランスホール隣に設置してある無料で使用できる場所。囲炉裏のついた畳敷きの座敷と木のフローリングの部分がある。昔のおもちゃが用意されていて、自由に遊べるほか、季節ごとに昔の着物を着ることができる。着付けは衣服の上からだがかなり本格的で好評を得ている。また資料に触れるハンズオンコーナーは半年ごとの入れ替えになっている。この部屋には展示解説員が常駐し来館者に対応している。

### (1) 衣装

ア 衣装着付け

体験学習室で時代衣装の着付け体験を行っている。着衣の

ままその上に着る形ではあるが、かなり本格的な衣装着付けであり、展示解説員は着付けの技術をきちんと学ばなければならないし、一回の時間もかかる。しかし、他の博物館ではここまできちんと着つけることはそれほど多くはないと思われる。当館の体験学習室のセールス・ポイントでもある。

(ア) 衣装着付け件数 530件

(イ) 着付けた衣装

春：打掛・番具足 夏：水干・半袴

秋：壺装束・町人旅姿 冬：山伏・白拍子

衣装の着付けはかなり本格的なものなので、そのため解説員の研修時間も多くかかるし、多人数の要望には一度に応え難い面もある。しかし、着終わった姿を鏡に映したり、デジカメで撮影したりして満足する来館者が多く見られる。

イ 衣装展示

春：大鎧・十二単 夏：稚児鎧・白拍子

秋：打掛・南蛮装束 冬：編綴・大工

イ 手作り資料展示

季節に関する手作りの資料を展示した。製作は展示解説員が担当。

7月：七夕飾り / 12月：クリスマスツリー / 1月：団子さし / 3月：手作り雛人形

ウ おもちゃ

畳の上で幼児におもちゃで遊ばせるお母さんや家族連れが多くみられる。壁の引き出しに用意されているおもちゃの利用も多い。修理を必要とするおもちゃもあり、解説員の係で担当している。

おもちゃの修理：50件

エ ハンズオンコーナー

来館者が展示品を実際に手に取り使用法を体験できるコーナー

会 期：平成27年4月～平成28年3月「古代の音色と輝き」（考古分野）

平成27年8月～平成28年3月「縄文土器パズル」（考古分野）

## 8 リニューアルチーム

将来の福島県立博物館リニューアルに向けて、福島県立博物館の課題の洗い出しとその対応策の検討の端緒をつけた。対応策の試行として平成28年度の福島県立博物館開館30周年事業を計画。展示・イベント・広報の各事業を立案した。

あわせて、リニューアルを実施した博物館・美術館の視察を実施し、新たな博物館・美術館の役割、リニューアルのコンセプト、リニューアルの成果等への情報収集を行った。

## 第6節 東日本大震災からの復興支援

平成23年3月11日午後2時46分、宮城県牡鹿半島沖の海底を震源としたマグニチュード9.0の大地震が発生した。震源域は岩手県沖から茨城県沖までの南北約500km、東西約200kmの広範囲に及んだ。福島県立博物館のある会津若松市は震度5強の揺れを被った。福島県立博物館では、建物の躯体そのものには被害はなかった。しかし、設備および資

料に若干の被害があり展示室の安全性の確認と修繕工事のため当面のあいだ休館とした。再開したのは平成23年4月12日(火)である。

福島県は地震とそれに伴う津波、そして東京電力福島第一原子力発電所の事故により甚大な被害を被った。当館では、震災からの復興支援を目的として、平成24年度に新たに「ふくしまの文化・自然遺産の発掘と再生プロジェクト」を立ち上げた。これは次の3つの柱からなっている。

### 1 ふくしまの宝の発掘と保全

市町村や文化施設および大学等と連携し、被災地域の文化財の救出と保全を図るとともに、地域の宝である文化財や自然史資料を改めて調査・収集し、その価値を明らかにすることに努める。

### 2 ふくしまの宝の公開と活用

救出および新たに収集した文化財およびその研究成果をさまざまな形で県民に発信し、地域の誇りをとりもどすとともに、それらを教材として、ふくしまの未来を担う子供たちの育成を図る。

### 3 ふくしまの再生と活性化

文化施設や地域の文化団体、市民グループと連携し、文化資源を活用した地域おこし、文化的事業の開催など、文化の力を用いて地域の再生と活性化を図る。

このコンセプトに基づいて復興支援の事業を展開している。平成26年度は次の事業を実施した。

## 1 文化財レスキュー

### (1) 平成27年度の活動

#### ア レスキュー作業の体制

前年度から継続して、福島第一原発事故による旧警戒区域内の資料館が所蔵する資料のレスキュー活動を、「福島県被災文化財等救援本部」(以下「救援本部」、当館は副代表・幹事・事務局)が中心となって行った(打ち合せ・幹事会など5回実施)。文化庁、文化財防災ネットワーク推進本部の支援指導を受けた。イ 旧警戒区域内の資料に関する作業

「救援本部」の計画にしたがって、①南相馬市内の資料の移送(5月)、②双葉町仏堂資料の搬出(6月)、③浪江町の区有文書の保全(7~8月)などを実施した。

#### ウ 保管施設の環境調査委

旧警戒区域から運び出された資料を保管する福島県文化財センター白河館(まほろん)の仮収蔵庫の環境調査に協力した(2回)。

#### エ レスキューされた資料の展示公開

(ア) 当館テーマ展「ふるさとの考古資料5【富岡町】遺跡探訪」(平成26年6月17日~平成27年5月10日)

(イ) 当館テーマ展「ふるさとの考古資料6【飯館村】遺跡探訪」(平成27年6月20日~平成28年5月8日)

(ウ) 当館企画展「被災地からの考古学1」(平成27年7月18日~9月13日)

(エ) 当館企画展「相馬中村藩の人びと」(平成27年10月10日~11月29日)

(オ) 当館移動展「被災地からの考古学1」(いわき市考古資料館 平成27年10月3日~12月14日)

(カ) 当館移動展「被災地からの考古学1」(南相馬市博物館 平成28年1月16日~3月6日)

#### オ 研修会・研優会への参加

11月5日~6日に福島県博物館連絡協議会研修会が開催された(会場:アクアマリンふくしま)。その他、救援本部主催の研修会や、他県の一時保管施設の現地調査などに参加した。

## (2) 震災から5年間のまとめと今後の課題

東日本大震災の発災から5年が経過した。各年次の活動内容は既刊の年報で紹介してきたが、これまでの5年間の取り組みをまとめ、今後の課題を記す。

#### ア 当館での被災文化財等の受け入れ状況

5年間で受け入れた件数は25件。受け入れた時期は、平成23年度がピークで、平成24・25年度は次第に減少し、平成26・27年度はなかった。平成23年度は、まさに緊急時の対応として件数が多いが、次第に各市町村の機能が復旧し救援本部の体制が整う中で件数は落ち着いていった。

受け入れの手続きは、平成23年度については「一時預かり」、その後は通常の受託(あるいは受贈)で対応した。保管場所については、平成23年度には臨時に考古作業室等を使用し、その後は通常通り収蔵庫へ移動させた。

受け入れ後に整理作業などを終えたものもあるが、未完了の資料群として、美術分野1件、歴史分野1件、自然分野2件、合計4件があり、今後継続して作業することが必要である。また、すでに返還したものもあるが、今後も旧警戒区域の再編・避難指示解除、復旧・復興の進み方に応じて返還してゆくことになるものもある。

#### イ レスキュー活動の実施状況

震災当初の平成23年度は、当館独自の活動と、ふくしま歴史資料保全ネットワークと連動した形でおもに活動し、平成24年度以後は、おもに救援本部の枠組みの中で活動した。被災地域や保管施設等へ出張して現地で活動した日数・人数については、下記の表の通りである。

年度	おもな内容	のべ日数	のべ人数
平成23	被災文化財・資料の調査・受け入れ、修復・整理、会議	25	57
平成24	会議、旧警戒区域資料館資料の搬出、保管施設の環境調査	52	108
平成25	会議、旧警戒区域資料館資料の搬出、保管施設の環境調査	58	128
平成26	会議、保管施設の環境調査、旧警戒区域学校資料等の搬出	33	61
平成27	会議、旧警戒区域仏堂・個人資料等の搬出	19	31

活動のピークは、平成24年度・25年度で、おもに旧警戒区域内の資料館(大熊町・富岡町・双葉町)資料の搬出作

業、保管施設（旧相馬女子高校等）の環境調査が、この時期に集中して行われた。その後、平成26年度・27年度は漸減した。

資料館所蔵以外の資料（学校など公的機関の資料、寺社・仏堂等の資料、個人所有の資料など）への対応は、各市町村からの要請を受けてサポートする体制をとりながら、今後も継続してゆく見通しである。

#### ウ その他の活動

レスキューした資料を、当館の企画展や移動展、あるいは常設展示内のテーマ展・ポイント展において展示公開した。また活動に関する報告会や研修会を企画したり、参加することがあった。

#### エ 今後の課題

震災後の5年の間に実施できたことの概要は、上記の通りである。東京電力福島第一原子力発電所事故によって住民の避難地域（旧警戒区域）が発生してしまった福島県においては、とり残された市町村の資料館資料を、県外からの多大な協力を仰ぎながら、組織的にレスキューできたことが、ひとつの大きな成果であった。今後の課題は、これらの資料が地域の歴史や文化を語る資料として、再び活用されるための場が創出されることである。

また、住民の方々の帰還や浜通り地域の復興が進む中で資料館所蔵以外の地域の様々な資料を、あらためて適切に保全してゆくことも、今後の重要な課題である。

今回の東日本大震災では、福島県としても、県立博物館としても、文化財の被災に備えたしくみや準備が十分にできていたとはいえない。ふたたび災害に襲われた場合に備えて当館の現状を点検し、改善すべきところや改善することや、県内の組織と連携した体制づくりを再構築してゆけることが、もうひとつの大きな課題になっている。

## 2 ふくしま応援ミュージアムイベント

従来実施してきたミュージアムイベントを、「ふくしま応援ミュージアムイベント」と名付け、被災された方々への励ましや、福島県を応援する意図をもったイベントを企画し実施した。

### （1）玄如節と会津の民謡

ア 日 時：平成27年6月27日（土） 13：30～15：00

イ 会 場：エントランスホール

ウ 参加者数：85人

エ 共 催：玄如節顕彰会の皆さん

オ 内 容

玄如節は、即興の掛合で歌うのを基本とする会津の民謡の源流でもある。今回のイベントでは、会津や東北各県の民謡を唄と踊りをまじえて披露し、最後に玄如節がもとになって生まれたといわれる民謡「会津磐梯山」でしめくくった。

### （2）市民盆踊り

ア 日 時：平成27年8月15日（土）19：00～20：30

イ 会 場：福島県立博物館 玄関前庭

ウ 参加者数：350人

エ 共 催：会津磐梯山盆踊り保存会

オ 内 容

博物館前庭に櫓を組み、会津磐梯山の歌に合わせて自由参加での盆踊り大会を開催した。踊りを通して、先の戦争やこの度の大地震でやむなく生命を奪われてしまわれた方々に、あらためて追悼と感謝の祈りを捧げた。

### （3）夏休みナイトミュージアム

ア 日 時：平成27年8月22日（土）17時30分～19時

イ 会 場：福島県立博物館常設展示室

ウ 参加者数：80人

エ 講 師：当館学芸員 相田優・金澤文利・佐藤洋一

オ 内 容

いつもと違う雰囲気の中を、懐中電灯の光を頼りに見学する「ナイトミュージアム」は、例年人気の高いイベントである。例年参加申込み者数が多いため、本年度は昨年度より定員を20名増員した。

### （4）クリスマス！クラシックアンサンブルコンサート

ア 日 時：平成27年12月19日（土）13時30分～15時

イ 会 場：福島県立博物館エントランスホール

ウ 参加者数：244人

エ 出 演：会津室内楽団 アンサンブル Coderanni

オ 内 容

毎年恒例となっている12月第3土曜日のクリスマスコンサート。音楽好きの方々にも博物館に親しんでいただく機会とするため、10年来行っており、毎回好評を博している。今回は会津地域在住の方々13人にご出演いただき、モンティ作曲「チャルダッシュ」などのクラシック音楽に、「荒野の果てに」「きよしこの夜」などのクリスマスソングも交えて16曲の演奏を聴いていただいた。

## 3 復興応援パートナー事業

平成24年度より「中期目標」に新たに掲げた「14. ふくしまの再生と活性化」を実現するものとして「福島県立博物館復興応援パートナー事業」を実施した。

### ◎ふくしまの再生と活性化

博物館などの文化施設、地域の文化団体や市民グループが連携し、文化の力を用いて地域の再生と活性化を図る。

#### 被災者支援のための文化的事業の開催

（1）被災者を応援し元気づける文化的な事業の開催

（2）各種団体が企画する支援文化事業の受け入れおよび支援

この目標に該当し、福島県の文化や歴史、自然の豊かさを伝える事業、東日本大震災や東京電力福島第一原子力発電所事故に向き合い、福島復興や再生を考え、将来像を共有することを目的とした事業の開催をパートナーとしてサポートすることと定めた。

これにより、文化による復興支援事業の効果的でスムーズな開催運営を促し、県民がそれらに享受する機会をより多く創出する。また、県立の文化施設として福島県立博物館が福島県の文化的復興支援における役割・責務を果たすことも

目的とする。

●復興応援パートナー事業

No.	事業名	主催者・代表	日時	会場
1	「3.11 ふくしま復興への想いを込めて2016from 会津」	会津地方振興局	3月5日 (土)	講堂・体験学習室・中庭・エントランスホール
			参加人数	
			864人	

## 4 はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト 2015

### (1) プロジェクト概要

昔を探り 今に向き合い 未来をつくる  
 街に集い 森に分け入り 海辺にたたずむ  
 思いを語り 心を描き ともに歩む  
 今、結ばれる、はま・なか・あいづ  
 ア 開催趣旨

2011年3月11日の東日本大震災、その後の東京電力福島第一原子力発電所事故により、福島県内には津波・地震による被害に加え放射線汚染被害、さらに、そこに由来するコミュニティの分断、風評被害が発生し、今なお多くの局面で復旧・復興が急がれています。

この状況から一歩でも前進するため、福島県立博物館と福島県下の各地域の博物館、文化事業に携わる大学、NPOなどの諸団体が連携し文化活動の支援を行うことを目的に、はま・なか・あいづ文化連携プロジェクトを2012年にスタートしました。

2012年度は、地域への愛着を象徴するような文化財の活用 に配慮し復興につながる文化的事業の継続的な展開をめざしました。

2013年度は前年度の実績を踏まえ、事業をさらに発展させるとともに、福島県立博物館と地域との協働、他分野との連携・融合、地域へのアウトリーチを積極的に推進しました。

2014年度は、震災後4年目の福島に必要な文化的な事業を、各団体との協議の上で計画し、福島の文化の豊かさの再認識 福島の現状の共有と発信を柱に実施しました。

震災後、数年間が経過し、被災者がおかれている環境、福島県民が被っている精神的な負担の状況は変化しています。また、県内各地域が抱える問題・課題の差異が時間の経過と共に際立つようになり、福島県を地理的に区分する「はま・なか・あいづ」それぞれの地域の問題・課題への丁寧なりサーチと対応が必須となってきています。

2015年度はそれらの解決につながるアプローチとなることを目的に、8つのプロジェクトを展開しました。

#### イ コンセプト

福島の文化を再発見し伝えること。新たに創造すること。

福島には、長い時間の積み重ねの中で生まれ、継承されてきたさまざまな文化があります。

それらは、はま・なか・あいづ各地域、海の、街の、山の豊

かな表情を持っています。

福島の文化にあらためて出会い、福島で大切にされてきた生き方、暮らし方、考え方を知り、学ぶ。

それは、今、この国に生きる私たち、未来に生きる子供たちにとって大事な示唆となるはずで

福島の文化を再発見する。

そして、それを伝え、みなさんと共有する。

そこから、未来へとつながる文化の創造の可能性が広がります。

福島が直面する課題を共有し、みなさんと考える場を生み出すこと。

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故によって福島は多くの課題に直面し、今なお苦悩しています。

その苦しみの多くは、しかし、私たちの暮らしと社会のあり方のきしみでもあります。

福島がおかれた状況は、ひとり福島だけのものではなく、やがて来るこの国の未来の姿の一部でもあるのです。

過去に学び、現在に向き合ってこそ、私たちは未来を創造することができます。

福島の課題を知り、思いを語り、ともに考えること。

そこから、進むべき道が見えてくることを信じて、私たちは、はま・なか・あいづの文化を結び、福島とあなたを結びます。

#### ウ 開催概要

(ア) 実施期間：2015年4月9日～2016年3月31日

(イ) プロジェクト活動期間：2015年4月22日  
～2016年2月29日

(ウ) 参加アーティスト：約20人

(エ) 主な活動エリア：南相馬市、浪江町、大熊町、いわき市、飯館村、福島市、西郷村、石川町、喜多方市、会津若松市、西会津町、三島町、他

(オ) 主催：はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

(カ) 構成団体：南相馬市博物館／福島大学芸術による地域創造研究所／福島大学うつくしまふくしま未来支援センター／いいたてまでいの会／NPO法人まちづくり喜多方／福島県立博物館

(キ) 協力団体：南相馬市国際交流協会／南相馬市市民活動サポートセンター／NPO法人まちづくりNPO新町なみえ／ふくしまキッチンガーデン運営協議会／NPO法人西会津ローカルフレンズ／NPO法人Wunder ground

(ク) 実行委員会委員長：赤坂憲雄（福島県立博物館長）

(ケ) 事務局：福島県立博物館

(コ) 助成：平成27年度文化庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業

### (2) プロジェクト

1. プロジェクト成果展（長野県大町市）
2. プロジェクト成果展（静岡県静岡市）
3. プロジェクト成果展（京都府京都市）

4. プロジェクト成果展（静岡県浜松市）
5. 記憶の紡ぎ場 南相馬コミュニティ創造プロジェクト
6. 記憶の紡ぎ場 暮らしの記憶プロジェクト
7. 記憶の紡ぎ場 相馬野馬追の記憶プロジェクト
8. 記憶の紡ぎ場 いわきセタプロジェクト
9. 記憶の紡ぎ場 飯館村の記憶と記録プロジェクト
10. 〈北〉を学び、知るプロジェクト
11. 福島祝いの膳プロジェクト
12. 夢の学び舎プロジェクト いわき学校プロジェクト
13. 夢の学び舎プロジェクト いいたて学校プロジェクト
14. 夢の学び舎プロジェクト 浪江学校プロジェクト
15. 岡部昌生フロッタージュプロジェクト
16. 福島写真美術館プロジェクト
17. 「黒塚」発信プロジェクト
18. グランド・ラウンドテーブル

実行委員会

## 1. プロジェクト成果展

### （1）大町市会場

2015年度は県外4ヶ所で、はま・なか・あいづ文化連携プロジェクトの成果展を開催した。2012年度から継続している事業成果の公開は、震災と原発事故の風化・忘却が進む近年積極的に展開すべきものとする。2015年度は、本プロジェクトに参加した写真家・アーティストらの協力を得て県外諸団体との連携で成果展を開催できた。関係者各位に深く感謝したい。

長野県大町市では、福島写真美術館プロジェクト参加写真家の本郷毅史氏の協力により大町市教育委員会と本プロジェクト実行委員会の主催により大町市のギャラリー・いーずらを会場に初の県外展を開催できた。会期中開催したギャラリートークは福島の実情と教訓を伝える場となった。大町市に避難した大熊町の方にお会いできたことは、成果展の一つの使命を示されたようであった。

ア 会 期：2015年7月31日（金）～8月23日（日）※月曜日休館

イ 会 場：ギャラリー・いーずら（長野県大町市3300-1）

ウ 協 力：大町市美術振興専門委員/原始感覚美術実行委員会/信濃大町食とアートの廻廊実行委員会

エ 主 催：大町市教育委員会/はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

### （2）静岡市会場

静岡県静岡市では、夢の学び舎プロジェクト参加アーティストの乾久子氏と静岡大学平野雅彦教授、会場となった金座ボタニカの下山晶子氏らの協力を得て、かつての会社社員寮をリノベーションしたアートスペース金座ボタニカで開催した。乾氏・フードデザイナー中山晴奈氏（福島祝いの膳担当）・静岡大学教授白井嘉尚氏・赤坂憲雄実行委員長が登壇したトークセッションは満員の参加者で、赤坂委員長からの提言「福島を自分の事に」を真剣に持ち帰ってくださった。

ア 会 期：2016年1月9日（土）～1月22日（金）※1月11日、1

2日、18日、19日は休廊

イ 会 場：金座ボタニカ3F・4Fアートスペース（静岡県静岡市葵区研屋町25）

### （3）京都市会場

京都市の京都造形芸術大学ギャラリー・オーブで開催した成果展「FUKUSHIMA SPEAKS」は、本プロジェクト実行委員会と京都造形芸術大学の主催。福島写真美術館プロジェクト参加作家華道家・片桐功敦氏のキュレーションで開催した同展は広い展示空間を利用し福島写真美術館参加作家の赤阪友昭氏・安田佐智種氏・片桐功敦氏・本郷毅史氏と岡部昌生フロッタージュプロジェクトの岡部氏作品を展示した。5回のクロストークを開催し、福島の記憶が薄れつつある関西圏で積極的な発信を行なった。

ア 会 期：2016年1月22日（金）～1月31日（日）

イ 会 場：京都造形芸術大学ギャラリー・オーブ（京都市左京区北白川瓜生山2-116京都造形芸術大学人間館1F）

ウ 主 催：京都造形芸術大学/はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

### （4）浜松市会場

最後の成果展は静岡県浜松市の鴨江アートセンターで開催した。同時に開催されていた飯館村の暮らしを伝える「いいたてミュージアム」とも共鳴し、浜松市のNPO法人クリエイティブサポートレッツのみなさんの積極的な参加もあった。

最終日にトークセッション「福島でレジデンス制作をすること」を開催、南相馬市で数ヶ月の滞在制作を行なった華道家・片桐功敦氏、福島の水源域をたびたび踏査して撮影している本郷毅史氏が福島で制作することの意義と課題について語り合った。

ア 会 期：2016年2月18日（木）～2月28日（日）※2月22日は休館

イ 会 場：鴨江アートセンター

ウ 主 催：はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

エ 主 催：鴨江アートセンター

オ 協 力：NPO法人クリエイティブサポートセンターレッツ

### （5）南相馬コミュニティ創造プロジェクト

入居者が減る仮設住宅、今後増加する災害復興公営住宅などで予想されるコミュニティの課題に取り組むためにコミュニケーションアーティスト開発好明氏により提案されたプランが「愛銀行」。コミュニケーションのためのお金の要らない銀行を仮想したアートワークショップである。参加者はまず自分の「できること」「やってみたいこと」を考える。

次に、お互いに出し合った「できること」「やってみたいこと」を組み合わせて実現することを考える。さらに、実現の方法を考えて、実際に行動する。参加を通して自分を愛し他者を愛する体験をする。

「愛銀行」ワークショップによる、災害復興公営住宅等の入居者の方々の語らいの場、新たな交流のきっかけを創出することを目指し、数度の公開ミーティング、試行ワークショ

ップを行なった。南相馬市では、これまで、はま・なか・あ  
いづ文化連携プロジェクトに御協力いただいた市民の方を中心  
に、手法、課題、効果について話し合い、現地コーディネ  
ーターの必要性が重要とされた。その後、福島大学渡邊晃一  
教授の協力を得て、福島大学で試行ワークショップを行なっ  
た。学生3~4名が一组となり、4組のチームでワークショップ  
に取り組んだ。あるチームは、「誕生日会をやりたい」「  
餃子を作れる」「似顔絵を描ける」という「できること」「  
やってみよう」とが集まり、その場にあった黒板、コピー  
用紙などを利用して即席の餃子パーティーが開かれた。プレゼ  
ントは黒板に描かれた似顔絵である。また、別のチームには  
「手芸店を開きたい」という「やってみよう」に対して  
「手芸が趣味で教えられる」という「できること」が見事に  
マッチし、その場で手芸教室が始まった。「海外旅行がした  
い」「歌を唄いたい」「楽器を演奏できる」がそろったチ  
ームでは即興で世界一周の歌が生まれた。

試行ワークショップを通じて、同じ専攻の学生のように親  
しい者の間にもある意外な一面を互いに知り、尊重すること  
で、より関係性を深めることができる手応えを感じた。避難  
が長期化している仮設住宅のサロン活動などで効果が期待で  
きるだろう。

試行ワークショップを経て、南相馬市でのコーディネ  
ーターを探したが、それ以降の事業展開には至らなかった。本  
事業では試行ワークショップにより手法を確立することができ  
たが、その後も「愛銀行」の活動は開発氏により続けられて  
おり、個展などでの発表により福島の現状が発信されている  
ことに感謝したい。

〈試行ワークショップ〉

ア 開催日時：2015年10月2日（金）

イ 会場：福島大学美術棟

#### （6）暮らしの記憶プロジェクト

「ここが縁側で、こうして庭を眺めました。」「あの頃は  
こんな夕陽は見られませんでした。」現地インタビューに御  
協力いただいた浪江町のKさんは、このような言葉を聞かせて  
くださった。

「暮らしの記憶プロジェクト」は2014年度に「福島写真美  
術館プロジェクト」に参加したアーティスト安田佐智氏  
のプロジェクトを継続、更新したものである。「福島写真美  
術館プロジェクト」で取り組んだのは津波で流失した住宅基礎  
を素材にした作品制作であった。復旧作業により被災地の整  
地が進み、残された住宅基礎の遺構も姿を消している。それ  
は、津波で奪われた暮らしの痕跡、土地の記憶、そこにあっ  
た暮らしを消し去ることでもある。2015年度はこれまでに制  
作した作品の素材となった住宅の住民の方からそこで営まれ  
ていた当時の暮らし、現在の住宅での暮らしの様子をお聞き  
し、震災と東京電力福島第一原子力発電所事故によりしいら  
れた被災地と被災者の変化をアーカイブ化することを目指し  
た。冒頭のKさんの言葉は浪江町請戸のかつての御自宅跡での  
インタビューの際の言葉である。当日は美しい夕陽の中、作

業を終えた。インタビューはまず作品の素材となった住宅の  
かつての住民を探すことから始まった。住宅地図をてがかり  
に浪江町役場、南相馬市小高区の区長さんを訪ねて情報を収  
集、住民の方々をご紹介いただいた。数名の方に連絡し、避  
難先、元の住宅跡などでインタビューを行い、かつての住  
まい、現在の住まいの見取り図を描いていただきながらその状  
況を録音・録画した。8名のインタビューは書き起こしテキ  
スト化されている。今後さらに映像編集がなされ作品化される  
予定である。

本事業は大規模な復旧事業の中でとすれば見過ごされ記  
録されることもない多くの被災者の個人史と地域の記憶を美  
術作品としてとどめ後世に残す貴重な事業である。被災の状  
況、現在の状況によって被災者の方々の心情はさまざまであ  
る。インタビューは細心の配慮と注意をもってなされるべき  
で、プライバシー保護にも慎重でなければならない。デリケ  
ートな交渉・調整にあたっていただいた南相馬市、浪江町の  
関係者の方々、そしてなによりインタビューに応じてくださ  
った皆様と安田氏に深く感謝申し上げる。

#### （7）相馬野馬追の記憶

写真家高杉記子氏は、震災後、国指定重要無形文化財相馬  
野馬追に出会った。2012年の福島写真プロジェクトに参加し  
その後も、祭りに参加する騎馬武者の方々と丹念に取材しポ  
ートレートを撮り続けている。現在は騎馬武者の方々と信頼  
関係を構築し、震災後も絶えることなく地域の誇りとして続  
けられた祭りの魅力とそれを取り巻く人々の思いを記録して  
いる。その蓄積は地域の文化資産としての意義を持ち始めて  
おり、2015年度はこれまでに撮影されたポートレートを展  
示する展覧会「野馬追ダイアログ」を南相馬市民文化会館ゆ  
めはっとギャラリーで開催。地元で公開の機会がなかった作  
品を紹介することができた。

合わせてモデルとなった小高区を中心とする騎馬武者の皆  
さん、モデレーター南相馬市博物館学芸員二上文彦氏によ  
るトークセッション「小高ダイアログ」を開催した。騎馬武  
者によるトークイベントは地元南相馬市でもこれまで開催  
されることはなく、ポートレート作品を仲立ちとしたアート  
プロジェクトの繋ぐ力によって実現したイベントであった。今  
回築かれた関係性は今後の制作と野馬追のさらなる追跡に活  
かされていくことだろう。

ア 展覧会「野馬追ダイアログ」

（ア）会 期：2016年2月3日（水）～2月12日（金）

（イ）会 場：南相馬市民文化会館ゆめはっとギャラリー  
イ トークセッション「小高ダイアログ」

（ア）開催日：2016年2月11日（木・祝）

（イ）会 場：南相馬市民文化会館ゆめはっとギャラリー

（ウ）出 演：阿部裕真氏（御小人頭、小高郷騎馬武者）  
佐藤邦夫（小高郷騎馬会長）

高島絹代（前小高商工会女性部長）

本田信夫（前三社五郷騎馬会長、土魂会会長）

山澤 征（小高区行政区長会長、相馬野馬追小高区執行委員



長)

鎌田真吾 (小高郷騎馬武者)

モデレーター：二上文彦 (南相馬市博物館学芸員) ・高杉記子 (写真家)

#### (8) いわき七夕

地域の祭礼の活性化とアートによる復興公営住宅のコミュニティ支援の両者を目指したプロジェクト。いわき駅前商店街で開催される七夕まつりは、自由で創造的な飾りの造形に特徴があり、この地域を代表する行事として親しまれている。しかし他地域同様商店街の賑わい創出に取り組みねばならない状況であり、七夕まつりにも何らかの活性化が求められていた。一方、震災の津波とその後の東京電力福島第一原子力発電所事故による多くの避難者がいわき市内に避難しており、さまざまな軋轢が地域に生じてしまっている。本プロジェクトの舞台となったいわき市小名浜の下神白団地をはじめ復興公営住宅への移転にともなうコミュニティの再建も大きな課題である。下神白団地は原発事故による4町からの避難者が別々の棟に入居し、さらに隣接していわき市の津波被災者が入居する団地が建設されている。入居者には独居の高齢者も多くコミュニティの再生が求められていた。そこで、団地入居者が七夕飾りの制作によっていわき七夕へ参加することで、団地内でのコミュニティの創出と七夕まつりの活性化につながるのではと考えた。

そこで、NPO 法人Wunder ground、NPO法人3.11被災者を支援するいわき連絡協議会、アーティスト竹内寿一氏が中心となり団地集会所で七夕飾りを制作した。七夕に参加するという目的意識、人と交流する楽しみ、ものを作り上げる喜びを共有することを大切に、アーティストやスタッフは寄り添う姿勢で臨んだ。完成した七夕飾りには参加者のさまざまな故郷が融合し、審査員特別賞を受賞した。

もちろん受賞が目的ではない。地域の祭礼を素材にアートが介在することで新たなコミュニティを創造できた。今後、同様の課題に向き合う際のサンプルとなりえるだろう。

七夕参加の後、参加者はカフェ、おでん屋台、ベンチなどに取り組んでいる。コミュニティは次第に自立した創造的な場に成長している。こうした取り組みへの支援は七夕プロジェクトから別のアートプロジェクト (福島芸術計画×ART SUPPORT TOHOKU TOKYO) に引き継がれた。アートプロジェクトの協働という点からも本プロジェクトの意義は小さくなかったと思われる。

また、下神白団地での七夕飾り作りワークショップと並行していわき市平のアートスペースで行った、一般参加の七夕飾りワークショップには、地域子どもたちなどが参加。地域の素材に取材した七夕飾りのテーマとして、いわき市に所在する海洋水族館アクアマリンふくしまが調査を行っているシーラカンスを選択。アーティスト竹内寿一氏と制作協力のいわき市の芸術集団十中八九が、参加者のアイデアを形にするサポートを行った。2015年8月に行われた七夕祭りには、下神白団地、平のアートスペース双方で作られた七夕飾りが

並んで掲げられ、原発事故避難者とその受け入れ地域であるいわき市住民の交流の場ともなった。平のアートスペースもまた審査員特別賞を受賞。ダブル受賞自体が、両者の交流のシンボルともなった。

#### ア 下神白団地復興公営住宅七夕飾り制作ワークショップ

(ア) 日 時：2015年6月25日 (木)、7月6日 (月)、7月13日 (月)

(イ) 会 場：下神白団地復興公営住宅集会所

(ウ) 講 師：竹内寿一

(エ) 講師補助：横山典子 (造形作家)

(オ) 共催：NPO法人3.11被災者を支援するいわき連絡協議会

(カ)：NPO法人Wunder ground/福島芸術計画×ART SUPPORT TOHOKU TOKYO/平商店会連合会

(キ) 主催：はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

#### イ 平七夕飾り制作ワークショップ

(ア) 日 時：平成27年 7月4日 (土)・7月5日 (日)・7月11日 (土)・7月19日 (日)・7月26日 (日)・8月2日 (日)

(イ) 会 場：もりたか屋

(ウ) 講 師：竹内寿一

(エ) 講師補助：宮本洋平 (造形作家)

(オ) 協力：NPO法人Wunder ground/NPO法人3.11を支援するいわき連絡協議会/平商店会連合会

(カ) 制作協力：十中八九 (芸術集団)

(キ) 主催：はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

#### (9) 飯館村の記憶と記録

本プロジェクトでは東京電力福島第一原子力発電所事故により全村避難をしている飯館村のみなさんへの聞き書き調査と、写真家の岩根愛氏による村人の話しの中の重要な場所、思い出の場所での360度風景写真の撮影を行った。避難が長期化する中で、大事な場所、思い出の場所の景色は変容し、除染活動による変化も日々進んでいる。そのような飯館村の現在を記録し、伝える事業だった。

また、飯館村の現状を広く伝える機会として現地視察ツアー「飯館村の試みと未来」を二日間にわたって開催した。両日とも定員が埋まるバスで飯館村内の除染現場、小規模太陽光発電所、試験農場、警戒区域ゲートなどを回った。一日目は農業を通して村の復興と現状発信に尽力する菅野宗夫氏のお話を現地でうかがった。二日目は飯館村文化財保護審議会委員の佐藤俊雄氏にバスに同乗していただき村内を回った後、福島市で飯館村を支援しているいいたてまでの会主催の「いいたてミュージアム」を見学し解散した。

東京電力福島第一原子力発電所からは40km以上離れているにもかかわらず原発事故による放射能汚染でいまだ全村避難状況にある飯館村では広大な地域で除染作業が行なわれており、村の景観は大きく変貌している。福島県内では良く知ら

れているこうした状況も県外には十分に伝わっておらず、参加者には少なからず驚きだったようだ。

参加したアーティストや静岡県のNPO法人メンバーは、この体験がきっかけとなり、福島の現状に深く関心を持ち、静岡県内での成果展に結びついていった。ツアーからの波及効果はこのように大きく、今後も必要とされている事業である。

#### ア 現地視察ツアー「飯館村の試みと未来」

(ア) 日 時：平成27年11月7日(土)

8日(日) 12:30～17:00

(イ) 開催地：飯館村

(ウ) 講師：菅野宗夫(農業・ふくしま再生の会)、佐藤俊雄(飯館村文化財保護審議会委員)

(エ) 主催：はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

#### (10) 〈北〉を学び、知るプロジェクト

東日本大震災、東京電力福島第一原子力発電所事故によって傷ついた福島、東北の復興のためには、自らの足下を見つめ直し掘り起こすことが必要である。そのことによって震災と原発事故で何が失われ、何を回復しなければならないのかが分かるはずだ。「〈北〉を学び、知る」プロジェクトは福島・東北の精神性、アイデンティティを学ぶ開かれた場と機会を創出する。

今年度は、エクスカージョン・シンポジウム・トークセッションからなる2日間のプログラムを喜多方市山都町(旧山都町)・昭和村で行なった。最初に地域史研究者とこの地域で活動実績のあるアーティスト丸山芳子氏・千葉奈穂子氏が講師を勤めエクスカージョンを実施、山岳信仰の足跡を山都町地区に探った。同日後半は「北を学ぶということ」をテーマに人類学者・石倉敏明氏、地域のまちづくり活動実践者IORI倶楽部事務局長・金親丈史氏、東北芸術工科大学大学院生でチュートリアル活動「東北画は可能か？」に参加する石原葉氏・久松知子氏が講師を勤め、それぞれが東北、北方についての取り組みを語った。

翌日はフィールドを昭和村に移し、「カラムシと民俗」をテーマにエクスカージョン、「昭和村に暮して」をテーマにトークセッションを行なった。カラムシ栽培とその商品化、織り姫と呼ばれる後継者育成事業に長年取り組んできた昭和村では、後継者による積極的なカラムシへの取り組みが行なわれる一方、農家民宿などを中心に食文化などの地域文化が大切に扱われている。参加者同様、参加者を受け入れた昭和村の担当者も村の文化にあらためて気付く機会となったのではないだろうか。同じ福島県会津地方でも個性的、特徴的な地域は多く存在する。今後はそうした地域同士が学びを通して結び付く事業展開も可能だろう。

#### ア 〈北〉を学ぶ エクスカージョン・シンポジウム・トークセッション

(ア) 開催日：平成27年8月27日(木)、28日(金)

(イ) 会場：大和川酒造北方風土館 良志久庵、織姫交流館  
8月27日(木)

・13:00～16:30 エクスカージョン「山と暮らし」

(ウ) 講師：小澤弘道(前喜多方市文化課長・会津坂下町史編纂室専門員)・丸山芳子(美術家)

・17:00～19:00 シンポジウム「北を学ぶということ」

(ウ) 講師：石倉敏明(秋田公立美術大学教授)・石原葉・久松知子(東北芸術工科大学大学院・東北画は可能か?メンバー)・金親丈史(IORI倶楽部事務局長)

モデレーター：丸山芳子

8月28日(金)

・9:00～12:30 エクスカージョン「カラムシと民俗」

(ウ) 講師：舟木由貴子(渡し舟主宰・元織姫)、千葉奈穂子(写真家)

・14:00～15:30 トークセッション「昭和村に暮らして」

(ウ) ゲスト：千葉奈穂子(写真家)・皆川キヌイ(農家民宿 やすらぎの宿とまり木経営)・菅野博昭(かすみ草専業農家・昭和花き研究会会長)・舟木由貴子

モデレーター：丸山芳子

(エ) 主催：はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

#### (11) 福島祝いの膳プロジェクト

福島では農水産物、食の安全・信頼が東京電力福島第一原子力発電所事故により大きく傷つき、いまだ回復の途上にある。こうした課題を抱えてはいるが、福島の食文化は実に豊かな広がりを持っている。県内各地での食材・食文化リサーチを継続しており、2015年度は、檜枝岐村・いわき市・南相馬市でリサーチを行なった。檜枝岐村ではハコネサンショウウオの漁を続けている方から漁法と加工法の聴き取りを行なった。いわき市では水産業と水産物の現状を調査した。東京電力福島第一原子力発電所からの汚染水により操業が制限されている福島県内の水産業であるが、カレイなど多様な魚種と加工法があることが確認できた。南相馬市では、南相馬市博物館の協力を得て、南相馬市小高区の浦尻貝塚資料から縄文時代の食文化についてレクチャーを受けた。

調査・制作期間：平成27年8月、平成28年1～2月

#### (12-1) 夢の学び舎プロジェクト いわき学校プロジェクト

豊間ことばの学校

津波被害を受けたいわき市豊間地区。辛くも難をまぬがれたいわき市立豊間小学校は、地域の拠点として震災後支援の受け入れ先の役割も果たしてきた。落ち着かない中での学校生活が続くにつれ、児童たちの学力低下が認められるようになった。そこで学校がはじめたのは児童の「ことば力」を培うことだった。教科の学習濃度をあげるのではなく、自らの考えを言語化する能力、相手の言葉を理解する能力をつけることがすべての教科の学力アップに繋がると考えたからだ。その取り組みをアートプロジェクトの切り口で支援したのが「豊間ことばの学校」。様々なジャンルの表現者が講師役を担い、多様なアプローチで児童たちの表現力を開放していった。

第1回の講師はアーティストの乾久子さん。ワークショップ「くじ引きドローイング」は、ある人が書いた言葉のくじを引いた人が、その言葉から想起する絵を描く（ドローイングをする）というもの。乾さんが静岡県から持参したくじを豊間小学校の児童が引き言葉がもたらすイメージを描いた。豊間小学校の児童が記したくじは後に静岡県でのワークショップで使われ、ワークショップを通じた福島県と静岡県の子どもたちの応答ともなった。

第2回、第3回の講師は俳優のカタヨセヒロシさん。即興芝居、即興パフォーマンスを得意とするカタヨセさんに導かれて、言葉と身体表現のキャッチボールをしながら子どもたちは言葉の瞬発力を鍛えた。第3回では、グループにわかれて台本を作成。何をどのような言葉と身体で演じるかを自分たちで考え、試みた。

第4回、第5回の講師はNPO法人芸術資源開発機構(ARDA)に所属し、対話型美術鑑賞を行っている鑑賞コミュニケーターのみなさんが講師。東西の名画をカードにしたアートカードを用いて感想の言葉を紡いだり、海辺の小学校である豊間小学校のために選曲されたドビュッシーの「海」を聞いてイメージする絵を描いたり。複数のコミュニケーターが対応することで、子どもたちの表現力が丁寧に引き出された。豊間ことばの学校には、1年生から6年生までの全学年から希望者30名（1学期実施の第1回のみ27名）が参加。回を重ねるにつれ、自発的に言葉を発し、自由に表現を楽しむ姿が印象に残るようになった。スタート時に課題としてあった児童たちの学力の低下は解消し、向上していることを学校から嬉しい成果としてお聞きしている。

#### ア くじ引きドローイング／ことばと絵のリレー

(ア) 日 時：2015年7月10日（金）14:30～16:00

(イ) 講 師：乾久子

#### イ ことばとカラダ 感じて動いて、みんなの物語をつくらう

(ア) 日 時：平成27年10月30日（金）14:30～16:00・11月6日（金）14:30～16:00

(イ) 講師：カタヨセヒロシ

#### ウ 音楽で何がみえる？音を描こう

(ア) 日 時：2015年12月11日（金）13:40～15:10

(イ) 講 師：ARDA

#### エ みてみてはなそう！絵の世界

(ア) 日 時：2015年12月18日（金）14:30～16:00

(イ) 講 師：ARDA

#### (12-2) 夢の学び舎プロジェクト いわき学校プロジェクト

##### 好間土曜学校～アートな自然～

福島県の太平洋側の南端にあるいわき市には、東京電力福島第一原子力発電所事故から避難した人々が多く移り住んでいる。事故当時、遠方に避難した人も何度かの転居の後に、県内でも特に故郷と気候風土が近く、かつ便の良いいわき市を居住地に選択することが多いからだ。

いわき市立好間第一小学校の学区にも複数の仮設住宅がある。避難してきた児童と受け入れ地域の児童が、自然に仲良くなる場をつくりたいという学校の課題に応じて実施されたのが「好間土曜学校」。休日の土曜日に開催する学校の学びのテーマには「自然の素晴らしさ」を掲げた。複数の表現者が講師となり、それぞれの表現手法でテーマを学び、創造を楽しむ授業を行った。

第1回の講師はアーティストの吉田重信さん。会場は広い窓を持つ廊下。赤・青・黄色のカラーシートを思い思いの形に切って窓に貼り付けた。カラーシートは、太陽の光を受けて廊下に影をつくる。影の形や濃淡から、太陽の運行や光の強さと影の関係を実感できた。

第2回の講師は陶芸家・美術家の出町光識さん。校庭で自分が気になる自然のかけらを集めた後、自然の歴史の産物でもある土を捏ねて好きな形の器をつくり、校庭から集めた葉、枝、木の実などを押し当てて、自然の足跡をつけた。

第3回の講師は美術家の河合晋平さん。人工物であるピンやチューブを素材にイモムシを制作。人工物を素材に自分の中から生まれる生き物。人工と自然について感じ取りながらつくったイモムシは、いわき市の形の葉っぱを食べているように展示した。

第4回の講師は書家の千葉清藍さん。いわき市を流れる夏井川の水と福島県産の油と和紙を使って墨流しを行った。福島には自然の恵みでできた豊かな産物があること、地域の水の大切さを学びつつ、偶然性の中で生まれる模様を楽しんだ。

第5回の講師はなにわホネホネ団の西沢真樹子さんと浜口美幸さん。ゲスト講師は地質・化石研究者の竹谷陽二郎さんと鈴木直さん、アーティストの吉田重信さん。いわき市で発見されたフタバサウルス（フタバズキリュウ）について、竹谷さんとフタバズキリュウの化石の発見者である鈴木さんのお話を聞いた後に、骨からわかる生き物の骨格について西沢さんと浜口さんがレクチャー。吉田さんのアドバイスを受けながら実物大のフタバサウルスの貼り絵を制作。いわき市の太古の生き物を学びつつ楽しく作ったカラフルなフタバサウルスが校内に展示された。

好間土曜学校には、4年生から6年生までの希望者約40人が参加。創造を楽しみつつ、自然の多様な姿や地域の歴史などを学んだ。自然や歴史の要素を取り込んだアートワークショップの可能性を感じさせるプログラムだった。

#### ア 光の鳥と好間の空

(ア) 日 時：平成27年7月4日（土）9:30～11:30

(イ) 講 師：吉田重信

#### イ テトテハアト葉っぱの足跡をお皿に残そう

(ア) 日 時：2015年10月10日（土）9:30～12:30

(イ) 講 師：出町光識

#### ウ いわきの水と墨で福島の紙にもようをつけよう！～夏井川の水で墨流し～

(ア) 日 時：2015年11月7日（土）9:30～12:30

(イ) 講 師：千葉清藍

## エ プリオルガノンのつくり方～イモムシの気持ちになって 大好きないわきを食べよう！

(ア) 日 時：2015年12月12日(土) 9:30～12:00

(イ) 講 師：河合晋平

## オ 実物大!?フタバサウルの海をつくろう～はりえで復活 むかしの生きもの～

(ア) 日 時：2016年1月30日(土) 9:00～12:00

(イ) 講 師：なにわホネホネ団

ゲスト講師：鈴木直、竹谷陽二郎、吉田重信

## (13) 夢の学び舎プロジェクト いいたて学校プロジェクト

東京電力福島第一原子力発電所事故により全村避難となった飯館村。世代を渡って受け継がれてきた地域の文化が断絶することを止めようと、飯館村立飯館中学校が2012年からはじめたのが、村民から村の文化を学ぶ「ふるさと学習」だった。毎年1年生は伝統芸能の田植踊りを学び、2年生は昔語りを聞いて紙芝居を作成。3年生は味噌作りを体験してオリジナルの味噌料理レシピを考えている。

はま・なか・あいづ文化連携プロジェクトでは、最も難易度が高い伝統芸能を学ぶ1年生に田植踊りの本来の意味を実感する機会を設け、その活動の様子、生徒たちの変化などを捉えた映像作品の制作を行う支援を行った。

飯館村には9つの田植踊りがあった。飯館村の田植踊りは、小正月に行われるその年の豊作祈願の踊りだ。数の多さは寒冷な飯館村が稲作に厳しい環境だったことを裏付ける。田植踊りは、単に踊りというだけでなく、厳しい環境でも土地を耕し、作物を育て、文化を積み重ねてきた故郷の歴史を伝えるものでもある。

集落の家々をめぐる祈りを捧げてきた田植踊り本来の姿を体験する古民家公演には、年間を通じて田植踊りの指導にあたっている保存会のみなさんをはじめ、衣装の着付け、会場利用などで村内外の多くの大人の協力もあった。

中学校入学したての5月から田植踊りを学びはじめ、仮設住宅や村の敬老会で披露し村のお年寄りたちから感謝を受け、次第に村の文化を受け継いでいる自覚を持つようになる生徒たちの変化は、カメラマンの赤間政昭さんが丁寧に追いかけた。現在の飯館村の風景を織り交ぜた映像作品は、飯館村の今を、今の日本に、そして将来の生徒たちに伝えることだろう。

## ア 田植え踊り古民家公演

(ア) 日 時：平成27年12月10日(木) 14:45～15:45

(イ) 会 場：境野家

(ウ) 撮 影：赤間政昭

(エ) 踊 り：飯館中学校1年生

(オ) 踊り指導・伴奏：飯館村飯樋町田植え踊り保存会の皆さん

(カ) 着付け協力：飯樋町の皆さん

(キ) 振付協力：小林由佳(振付師・ダンサー)、手代木花野(振付師・ダンサー)

(ク) 協力：いいたてまでの会

## (14) 夢の学び舎プロジェクト 浪江学校プロジェクト

浪江町立浪江小学校と津島小学校は、東京電力福島第一原子力発電所事故後、福島県二本松市に避難し、旧下川崎小学校の校舎を仮校舎としている。故郷を離れた時間が重なるにつれて、浪江町について知ることが少なくなっている児童たちに、故郷の良さを伝えるべく創設されたのが「ふるさとなみえ科」だ。巨大大事故からの避難という異常事態にあって、浪江小学校もまた学校が果たせる役割を考え、動いている。はま・なか・あいづ文化連携プロジェクトでは、「ふるさとなみえ科」で生まれた浪江町を読んだ句を読み札とする絵札つくりと校内展示のお手伝いした。

浪江町の海や公園、お祭りや伝統工芸などを讀んだ句には作成した児童たちの思いが詰まっている。それを視覚化する作業に絵本作家の飯野和好さんが協力した。ご自身のイラストによるカルタ制作の実績がある飯野さんが「できるだけはっきりと強い色合いで」というポイントを伝えると、あとは児童たちが自由に発想することを重視した。完成した絵札は力強さも感じられる仕上がりととなった。

年度末には、お気に入りの絵札を紹介する展示を校内で実施。生徒たち自ら作文した解説を添え「なみえっこカルタ」を通じて浪江町を伝える「浪江小学校ミュージアム」を作り上げた。

## ア 浪江町カルタ制作ワークショップ

(ア) 日 時：2015年10月 7日(水)・10月13日(火) 13:50～15:30

(イ) 会 場：浪江小学校二本松仮校舎

(ウ) 講 師：飯野和好

## イ 浪江カルタ展示ワークショップ

(ア) 日 時：2016年3月10日(木) 14:25～15:15

(イ) 会 場：浪江小学校二本松仮校舎

## (15) 岡部昌生フロッターージュプロジェクト

2012年より継続している本プロジェクトは、はま・なか・あいづ文化連携プロジェクトの中心となるプロジェクトである。当初の南相馬市を中心とする活動から飯館村、大熊町、石川町へと活動範囲を拡大している。震災後の生々しい記憶被災地の歴史と記憶の古層をフロッターージュの技法で採取、記録する活動を続けてきた。その過程で南相馬市では津波の被害と密接な関係がある干拓と耕地整理の歴史が、さらに大熊町、石川町における活動では、同町立歴史民俗資料館の協力により原発事故に至る近代史の断面にエネルギー産地としての福島の姿が浮かび上がった。石川町は大正から昭和40年代まで石英、長石などの鉱物を盛んに産出していた。そのため、戦時中は軍部によるウラン採掘が試みられた歴史があり原発事故後、注目を集めることとなった。しかし、重視すべきはウラン採掘に至った資源産地としての福島の歴史であろう。残された選鉱場基礎のコンクリート塊のフロッターージュはこの歴史を県内外に伝える大作となった。

沿岸部、東京電力福島第一原子力発電所からは遠く、震災

の影響が無かった飯館村では放射能汚染による深刻な被害が引き起こされ、全村避難が未だに続いていることは福島県内では周知の問題である。しかし、震災から5年を間近にして県外での震災の記憶の風化は一層進行している。2015年度は飯館村で伐採されたイグネの切株の連作に取り組んだ。イグネとは季節風から家屋敷を護り、燃料・木材を得るための屋敷林である。除染作業が大規模に進む飯館村内では多くのイグネが伐採された。同村内佐須の個人宅にあるイグネも例外ではない。震災のみならず原発事故の影響がなおも拡大している福島の現状を伝える強いメッセージを持った作品制作はまだ終わりが見えない。

プロジェクト成果展は福島市、いわき市で開催し今年度の成果を紹介した。福島市ではトークイベントを開催。制作趣旨について語った。成果展京都会場はその広いスペースを利用しこれまでの福島での岡部昌生プロッタージュプロジェクトを俯瞰できる構成となった。実物のモノと触れ合うことでしか生まれない岡部氏のプロッタージュは震災と原発事故を経験した福島の証言者として今後も重要な存在として成長していくだろう。

#### ア 成果展福島

- (ア) 会 期：平成27年10月17日(土)～10月30日(金)
- (イ) 会 場：県庁南再エネビル3階
- (ウ) 協力：飯館電力株式会社

#### イ トークセッション「被曝樹／被爆樹」

- (ア) 開催日：平成27年10月18日(日)
- (イ) 会 場：県庁南再エネビル3階

#### ウ 成果展いわき

- (ア) 会 期：10月24日(土)～11月27日(金) ※会期中無休
- (イ) 会 場：もりたか屋3F 福島県いわき市平3-34
- (ウ) 協 力：特定非営利活動法人 Wunder ground

#### (16) 福島写真美術館プロジェクト

震災後いち早く活発な活動が始まった写真・映像表現に着目し、震災後に変った福島の姿、震災後も変わらない福島の姿をとどめる活動を支援し、成果を公開している。2015年度は「福島環境記録」・「福島の水源をたどる」・「福島の自然を紹介する」・「福島の民俗を紹介する」の4プロジェクトを4名の写真家が担当した。

福島環境記録プロジェクトは、写真家赤阪友昭氏が担当。奥会津地方の三島町間方集落で、山と自然とともにある集落の人々の暮らしを追った。限界集落と呼ばれながらも豊かさに満ちた生活は原発事故後の希望でもある。成果展「山で生きる」を三島町交流センター山びこで開催し、会期中4日間「移動式赤阪写真館」を開催、ポートレート撮影を通じて地域の人々の姿を記録し、交流のきっかけとなった。広報紙の体裁の簡易な記録集を作成し集落各戸に配布した。地域の再発見につながるのを期待している。

福島の水源をたどるプロジェクトは、写真家本郷毅史氏が担当。福島を代表する河川の阿武隈川、夏井川などで源流を探り撮影した。震災でも変ることなく流れ続ける清冽な水は

生命の源でもあり、原発事故後にさらに輝きを増している。いわき市で行なわれた展覧会に招かれるなど、本プロジェクトをきっかけに活動が広がっている。

福島の自然を紹介するプロジェクトに参加した写真家村越としや氏は須賀川市の実家周辺をたびたび撮影している。写真家にとっては親しい何気ない風景だが、そこを撮影する意味は原発事故後に変化したという。写真家の視線は地域と人の関係性を考えさせる。福島県出身の若手写真家としても活躍を期待し、支援していきたい。

福島の民俗を紹介するプロジェクトには写真家土田ヒロミ氏が参加、原発事故後から福島県内の撮影を続けている写真家と連携し、除染作業などで変貌する里山や田園を撮影、記録した。

第1回福島写真美術館プロジェクト成果展は、長野県大町市の大町リノプロを会場に開催。商店街の活性化と市民活動の場として空き店舗を改装した会場で地域の方々と協働して展示作業を行った。第2回は、福島市の県庁南再エネビルを会場に開催した。

#### ア 福島環境記録プロジェクト成果展「山で生きる」

- (ア) 会 期：平成28年2月11日(木)～2月21日(日)
- (イ) 会 場：三島町交流センター山びこ
- (ウ) 後 援：三島町
- (オ) 主 催：はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

#### イ 移動式赤阪写真館

- (ア) 日 時：平成28年2月13日(土)～2月14日(日)・2月20日(土)～2月21日(日)
- (イ) 撮 影：赤阪友昭

#### ウ 福島写真美術館プロジェクト成果展in大町

- (ア) 会 期：平成27年8月1日(土)～8月24日(月) 10:00～17:00
- (イ) 会 場：大町リノプロ
- (ウ) 共 催：原始感覚美術祭実行委員会
- (エ) 後 援：大町市教育委員会
- (オ) 協 力：大町リノベーションプロジェクト／信濃大町食とアートの回廊実行委員会

#### エ 福島写真美術館プロジェクト成果展in福島

- (ア) 会 期：2016年2月8日(土)～2月21日(日) 10:00～17:00
- (イ) 会 場：県庁南再エネビル3F
- (ウ) 協 力：飯館電力株式会社
- (エ) 主 催：はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

#### (17) 黒塚発信プロジェクト

安達ヶ原の鬼婆伝説は謡曲「黒塚」として広く知られている。生き肝を求め都から奥州安達ヶ原に流れ着いた乳母は黒塚の岩屋にこもりその日を待つ。念願の生き肝を得た女が見たものは都に置いてきた我が子に与えたお守りであった。悲

しみのため女は鬼女と化す。深い悲しみと怒りが凝縮したこの説話には、原発事故後の実に今日的な東北の宿命が色濃くにじむ。本プロジェクトでは福島大学渡邊晃一教授を中心に黒塚をテーマに福島の課題を身体表現によって表現することに取り組んでいる。

2014年度に舞踊家・コンテンポラリーダンサーの平山素子氏主演、映像監督高明氏による映像作品「KUROZUKA黒と朱」を黒塚ゆかりの二本松市の観世寺、浪江町の津波被災地、南相馬市、福島大学で撮影した。引き続き、2015年度は、舞踏家大野慶人氏主演、映像監督古田晃司氏による映像作品「KUROZUKA黒と光」を制作した。慶人氏の父大野一雄氏がかつて黒塚を演じた際の衣裳を使用した公演は一般にも公開され、黒塚の現地に取材した映像を交え編集した。

評論家・東雅夫氏、伝統芸能研究者・懸田弘訓氏、福島大学教授・鈴木裕美子氏をお招きし渡邊氏がモデレーターをつとめたトークセッション「黒塚」では、「KUROZUKA黒と朱」「KUROZUKA黒と光」を上映し、民俗学・文学・美術の視点から黒塚の源流について活発なトークが行なわれた。映像は他団体の学会、シンポジウムなどでも視聴され、福島・東北の歴史と教訓を伝えている。

#### ア 対談「大野慶人×渡邊晃一」

(ア) 日 時：平成27年12月20日（日）18：00～20：00  
(イ) 会 場：大野一雄舞踏研究所  
(ウ) 協 力：大野一雄舞踏研究所  
(エ) 主 催：はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

#### イ 公演「Kurozuka 黒と光」

(ア) 日 時：平成27年12月21日（月）14：00～18：00  
(イ) 会 場：大野一雄舞踏研究所  
(ウ) 協 力：大野一雄舞踏研究所  
(エ) 主 催：はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

#### ウ 「黒塚」上映会＋トークセッション

(ア) 日 時：平成28年2月21日（日）14:00～16:30  
(イ) 会 場：フォーラム福島  
(ウ) 出 演：東雅夫（文芸評論家／「幽」編集顧問）・和合亮一（詩人）・懸田弘訓（伝統芸能研究者／福島県民俗芸能学会調査団団長）・鈴木裕美子（舞踏研究者／福島大学教授）  
(エ) モデレーター：渡邊晃一（美術家／福島大学教授）  
(オ) 主 催：はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

#### (18) グランド・ラウンドテーブル

##### クロージング・フォーラム

グランド・ラウンドテーブルは、はま・なか・あいづ文化連携プロジェクトの事業報告、発信、そして福島県内で震災後に行われている文化活動の情報共有を目的に年間数回行っている。今年度は3回開催、第1回は「ここで作る演劇、演劇で創るこれから」をテーマに、地域文化の拠点施設いわき芸術文化交流館アリオスで開催。近年、いわき市を中心に演劇

に関わる活動を展開してきた方々、演劇的表現を追求するアーティストが集い、様々な場所で行われる演劇公演の事例から、演劇が持つ《場所性》と《可能性》を参加者と共に考えた。登壇者は、相馬千秋（アートプロデューサー）・やなぎみわ（アーティスト、京都造形芸術大学教授）・岩間賢（アーティスト、愛知県立芸術大学講師）・長谷基弘（劇作家、演出家、劇団桃唄309代表）・永山智行（劇作家、演出家、劇団こふく劇場代表、宮城県立芸術劇場演劇ディレクター）・くらもちひろゆき（劇作家、演出家、架空の劇団 主宰）・カタヨセヒロシ（俳優、ダンサー、6dim+ 共同主宰）・島崎圭介（NPO法人Wunder Ground 前代表）の各氏、モデレーターを執行委員長赤坂憲雄がつとめた。

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故から5年を迎え、被災地では日常の回復とともに震災の記憶の風化が進んでいる。第2回のグランド・ラウンドテーブルは南相馬市市民情報交流センターを会場に開催した。津波被害と原発事故の二重の苦難を経験した南相馬市でのグランド・ラウンドテーブルでは、年月を経ても決して忘れてはいけない「鎮魂」の思い、前に進むための「忘却」、そして苦難を乗り越えた先に立ち上がる「創造」をテーマに掲げた。第1部は、南相馬市に長期滞在制作を行なった片桐功敦氏、地域の民俗を長年研究している岩崎真幸氏、震災後災害FMの番組を通じて地域の方との対話を継続し、2015年南相馬市に転居した柳美里氏、起業などを通じて小高区の地域再生に取り組む和田智行氏に登壇いただき、この3つのキーワードを指針に語り合った。

第2部、第3部は、小高区の同慶寺を会場にお借りした。第2部では、大堀相馬焼・春山窯の御協力、講師を勤める華道家・片桐功敦氏によるワークショップによって大堀相馬焼を花器に同慶寺本堂を花で飾った。参加者はいまだ自由な立ち入りができない地域となったままの大堀相馬焼の産地に思いをはせたことだろう。第3部では、柳氏、片桐氏に同慶寺御住職田中徳雲氏に加わっていただいた。双相地域の歴史の基盤を作った相馬家の菩提寺での語りは、南相馬発の新しい文化の萌を感じさせた。

第3回のグランド・ラウンドテーブルはクロージング・フォーラムとして福島県立博物館を会場に開催した。はま・なか・あいづ文化連携プロジェクトは、アートプロジェクトを中心にトークイベント、ワークショップ、展覧会などを福島県内外の諸団体と協働して2012年から実施してきた。同じく重要な目的の一つが、福島県内でのアートを介したネットワークの形成、これまでにない新たな視点を持った文化の創出である。

本フォーラムでは、これまで国内の多くのアートプロジェクトを支援し、ネットワーク化を推進してきた企業メセナ協議会専務理事加藤種男氏、本プロジェクト参加作家の岡部昌生氏、いわき市でのプロジェクト展開の中核として携わったNPO Wunder Groundの会田勝康氏、実行委員会メンバーでもある南相馬市博物館学芸員二上文彦氏を招き、「アートは何を

残せたか 震災から5年の福島・アート・地域」をテーマに報告、講演、クロストークを行った。会田氏、二上氏からは本事業がコミュニティ、地域文化に与えた成果について報告があった。岡部氏からは福島で制作に臨むアーティストの姿勢について言及がなされ、加藤氏からは福島でのアートプロジェクトの可能性について示唆に富むご講演をいただいた。今年度までの締めくくりであると同時にこれからのスタートでもあった。

## ア 第1回グランド・ラウンドテーブルinいわき

### 「ここで作る演劇 演劇で創るこれから」

(ア) 日 時：平成27年6月13日(土) 15:30～19:30・2月14日(日) 13:00～17:00

(イ) 会 場：いわき芸術文化交流館アリオス本館2Fカンテイナーネ

(ウ) 講 師：相馬千秋(アートプロデューサー/NPO法人芸術公社代表理事)・やなぎみわ(アーティスト/京都造形芸術大学美術工芸学科教授)・岩間賢(アーティスト/愛知県立芸術大学講師)・長谷基弘(劇作家/演出家/劇団桃唄309代表)・永山智行(劇作家/演出家/劇団こふく劇場代表/宮崎県立芸術劇場演劇ディレクター)・くらもちひろゆき(劇作家/演出家/架空の劇団主宰)・カタヨセヒロシ(即興パフォーマンス集団6-dim+共同主宰)・島崎圭介(NPO法人Wunder ground代表)・赤坂憲雄(福島県立博物館長/学習院大学教授/はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員長)

(エ) 協 力：NPO法人Wunder ground

(オ) 主 催：はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

## イ 第2回グランド・ラウンドテーブル

### 「震災から5年 鎮魂・忘却・創造」

(ア) 日 時：平成27年11月27日(金) 13:30～17:30・11月28日(土) 10:30～16:00

(イ) 会 場：南相馬市市民情報交流センター 大会議室、同慶寺

(ウ) 講 師：岩崎真幸(みちのく民俗文化研究所代表)、片桐功敦(華道家)・柳美里(小説家、劇作家)・和田智行(小高ワーカーズベース代表)・田中徳雲(同慶寺住職)

(エ) 協 力：南相馬市博物館/同慶寺/大堀相馬焼協同組合/春山窯

(オ) 主 催：はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

## ウ はま・なか・あいづ文化連携プロジェクトクロージングフォーラム

### 「アートは何を残せたか 震災から5年の福島・アート・地域」

(ア) 日 時：平成28年3月6日(日) 14:45～18:30

(イ) 会 場：福島県立博物館 講堂

(ウ) 特別講演講師：加藤種男氏(アサヒビール芸術文化財団事務局長)

(エ) 講演講師：岡部昌生氏(美術家)

(オ) 報 告：二上文彦氏(南相馬市博物館学芸員)、会田勝康氏(NPO法人 Wunder groundコミュニティコーディネーター)

(カ) 主 催：はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会

## 実行委員会

はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会は県内の西会津町から南相馬市、いわき市の各地域を拠点に活動するNPO、団体、文化施設、大学等のメンバーで構成する。2015年度は5回の実行委員会が開催された。協議・検討・報告・連絡の場となっただけでなく志を共有する場でもあった。その志とは言うまでもなく、福島の復興に尽力することである。

福島県は広い。各地域では独自に文化芸術活動が行われ、またその芽が芽生えつつある。そうした芽を育てるインキュベーションの場、結び付けるアーツカウンシルとして、はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会が機能できる可能性が見えてきている。

## 5 震災遺産保全プロジェクト

東日本太平洋沖地震は県内に甚大な被害をもたらし、原発事故も引き起こした。これらにより多量の瓦礫、仮設住宅や汚染物質の保管施設など予想しなかった非日常の景観を新たに生み出した。本プロジェクトは、震災が発生させたこれらの遺産を次世代に震災の経験を伝える地域の重要な歴史資料と捉え、それらを保全し、防災教育等へ活かすための取り組みである。

事業は文化庁の文化芸術振興費補助金(地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業)の採択を受け、実行委員会を組織(実行委員会構成団体：相馬中村層群研究会・南相馬市博物館・双葉町歴史民俗資料館・富岡町歴史民俗資料館・いわき市石炭化石館・ふくしま海洋科学館・いわき自然史研究会・福島県立博物館)し、事務局を県立博物館内において以下の事業を実施した。

### 1. 各種検討会議の開催

検討会議は5月・10月・3月に開催し、延20名の委員の出席があった。年度当初では、「震災年表」の作成や「Jビレッジ」など復興に関わる現場の調査も必要との意見があった。2回目の会議では、阪神淡路地区の先進事例調査報告が行われ、「人と未来防災センター」等の施設運営にOBや当事者が深く関わっていることが重要であるとの声が相次いだ。また何を伝えるのかを明確に、保持していかないと、施設の独自性が失われることや、一般化してしまう恐れがあるとの意見もあった。最終報告では、中身の濃い普及事業があるのに参加者が少ないものもあり、効率・効果的な広報や、震災を継承すべき世代がすでに存在していること、たとえば当時小学1年生がこの春に中学生になるなど震災からの経年に対応したプログラムの開発の必要性も提案があった。

## 2. 震災遺産の調査・保全の実施

### (1) 震災遺産に関する各種調査の実施

#### ①総合調査・収集の実施（調査・収集）

調査・保全は約30回実施し、収集した震災遺産は600件程である。今年度は震災の多様性・広域性を意識し、本県浜通り地方の9自治体に加え、避難や原子力発電所事故の影響が及んだ中通りや会津地方の7自治体でも調査・保全を実施した。特に「避難」関係では一次避難所・長期継続避難所・応急仮設住宅団地の調査を行い一定の成果を上げた。浪江町や富岡町の一次避難所はほぼ1日だけ運営された場所がそのまま残っている学校があり、遺留品の全リスト作成と収集保全を実施した。また富岡町では避難所対応や全町避難を指示した「災害対策本部」跡も存置されており、調査と全資料の回収を行っている。存置された状況は机の上の遺留品を含めすべて手計測により平面図を作成した。これらにより市町村間での災害備蓄品の差異や、個別の避難所ごとの不足物品の把握が可能となり、また災害対策本部と避難所における避難者人数の把握や情報伝達のあり方など当時の状況を検証できる歴史資料となり、今後の防災・減災や災害対応に寄与することができると考えている。

#### ②震災標本採取（標本作成）

平成23年4月11日、震災の発生から1ヵ月後にいわき市域を中心に大きな余震が襲い、各地に地表活断層が出現した。その多くは改変され今は田人地区の山林中に残されている。地震や地殻変動、そして震災遺産の多様性も示すものとして着目し（平成26年度は講演会と見学会を実施）、そのメカニズムと震災の記憶を伝えるため可視的・可動的な教材化するため、活断層の通過するラインを発掘し現れた断層部分の剥ぎ取り標本を作製した。作業は10月中旬に地区協議会のメンバーと協働で行い、剥ぎ取る段階では地元中学生の参加もあった。中学生は震災当時小学校低学年であり、震災の記憶が薄い世代である。ふるさとに何が起きたのかを改めて知る機会となった。

#### ③先進事例調査（事例調査）

8月中旬に、大震災から20年経った阪神淡路地区の大震災メモリアル施設の大小7箇所の調査及び視察を実施した。「人と未来防災センター」が代表的な施設であるが、多様な観点・手法で震災を伝えてきた実績がある。また淡路島には野島断層を保存する施設があり、いわき市田人地区の活断層を地域歴史資産と活用する観点から、外部協力者としていわき市田人支所の地区協議会担当職員が同行し、負の遺産を地域振興に活かすためのイメージを持っていただくことを企図した。

また、8月下旬には、日本ジオパークに認定されている福島県磐梯山ジオパークの視察研修をいわき市田人地区協議会メンバー8人が参加して実施した。これも田人地区の活断層を地域資源として利活用するため、管理・運営・利活用のノウハウとマンパワーの展開の仕方を学ぶことを目的としている。研修会にはジオパークの認定ガイド3名を講師として迎

え、熱心な質疑応答が繰り返された。

### (2) 資料の整理・保全

収集した資料は原則的にすべて福島県立博物館へ搬送している。ここからの扱いは通常の博物館資料と同じであり、燻蒸を行って収蔵庫に保管される。燻蒸はコンテナ付トラック内で実施する「トラック燻蒸」方式を委託して行った。

一部の資料は脆弱化しており、補強や修復の措置が必要である。また鉄製のものは津波被災により錆化が進んでおり、試験的な脱塩処理を実施した。その際津波によって付着した土砂などは津波を示す痕跡として保持する方針とし、脱塩や洗浄時に剥落しないようにアクリル樹脂で固着するようにした。このような措置は通常に博物館資料に対してはあまり採用されない手法であり、痕跡を残す意味について今後検討が必要になってくると思われる。

このほか脆弱資料や脆弱部分としてプラスチック製やフジツボなどの生態痕跡があり、文化財科学や保存科学の観点から、適切と思われる試薬を準備し、補強措置を実施した。データベース構築では、震災遺産現地で撮影した写真も膨大な量があり、日付ごとのデータファイルから地域地点別ファイルに移行する作業を継続した。同時に地区・地点別の基礎データベースの更新も実施し、一部データをデータベースソフトに移行するため、フォーマットの整備に着手した。またデータベース作業の一環として、「震災年表」を作成した。これは、原子力災害による避難指示区域の変更など日々刻々と変化する状況が、震災遺産の意味付けに直結する場面が多い中で、状況や制度の変化を確認できるものが必要だとの観点から整備に着手したものである。福島民報社の縮刷版（DVD）を参考に、取り上げる項目を検討して震災発生から約5年分の年表データベースを作成し、その成果の一部は福島県立博物館での震災遺産展示会場で活用した。

## 3. 普及事業の開催

### (1) 野外講座

#### ①体験型震災遺産保全事業（ワークショップ）

前述のいわき市田人地区の活断層の剥ぎ取り作業を本事業の一環として実施した。博物館やプロジェクトだけの単独事業ではなく、地域の歴史・文化資産として地域の人々に広く公開し、ふるさとに何が起きたのか認識してもらうことを目的として実施した。体験プログラムは、地層同定や剥ぎ取り作業指導で現地指導に立ち会った大学講師の説明を受け、理解を深めた上で保全作業を体験するものである。保全作業期間中の参加者及び見学者は102名、実行委員会及び地区協議会の参加者は延58人であった。

#### ②震災遺産現地説明会（現地説明会）

アウトリーチ事業いわきセッションのプログラムの一つとして12月13日に富岡町で実施した。富岡駅前の津波被災状況や富岡町文化交流センター内に設けられた「災害対策本部」跡などを視察した。いわき市からマイクロバスに乗り、富岡町職員（実行委員）が案内・説明を行った。とくに後者はいままで公開されることがないため、仙台や東京方面など遠



方より参加者があり、受付開始早々に定員に達した。

なお富岡駅周辺は復興工事により現在は、更地になっている。災害対策本部も施設改修工事のため2月に物品の撤収が完了したため、全国的にも稀な災害対策本部跡の公開は最初で最後となった。

## (2) 震災遺産を活用した教育普及事業

### ①アウトリーチ事業「震災遺産を考えるⅡ」の実施（アウトリーチ）

下記県内4会場で震災遺産の展示会をメインプログラムとしてアウトリーチ事業を開催した。郡山セッションは1日だけの開催であったが、他会場では昨年度からの要望を受け、長期の開催とした。福島大学セッションではシンポジウム、いわきセッションでは講演会と富岡町震災遺産見学会を実施した。会津セッションでは、トークセッションと県内で初めて「震災遺構」をテーマにしたシンポジウムを開催した。同時開催として平成26年度から継続している県内の震災遺構3次元デジタル計測（東北大学との連携事業）の成果をミックスドリアリティ（MR）のブースを構築してアーカイブ体験する事業を県内で初めて実施した。

・9月5日 郡山セッション（共催）（会場：郡山市中央公民館）プログラム参加者88名

・9月26日～10月6日 福島大学セッション（主催）プログラム参加者411名

・12月5日～12月20日 いわきセッション（主催）（会場：いわき市石炭・化石館）プログラム参加者4,894名

・2月11日～3月21日 会津セッション（主催）（会場：福島県立博物館）プログラム参加者6,365名

### ②震災遺産教育活用研修会（研修会）

7月31日に震災遺産の学校教育現場での利活用に繋げる

機会として県立博物館で研修会を開催した。中学及び高校の教職員11名が参加した。震災遺産保全プロジェクトの概要を説明した後に、震災遺物の見学を行った。その後の質疑応答の中で、現在の学校現場の防災教育は、放射能教育が主体で、実際に命を守る教育がまだ手薄だという発言があった。震災遺産は生々しさもあるが、防災を意識するきっかけになり得るとの意見もあった。

### ③震災遺産出前講座（出前講座）

平成27年度の学校連携事業は、高校文化祭への協力として実現した。会津地域の高校の生徒が、就職活動や県外への進学準備を進める中で「福島は大丈夫？」と問い掛けられても現実感が乏しく自分の言葉で答えられなかった経験がきっかけだという。上述の研修会に参加した担当教師の引率の下、博物館にて収集震災遺産の見学と浜通り地区の被災地訪問を行い、その成果を文化祭の震災遺産展示会で公表した。高校生の思いにどれほど寄与できたのか不明な点もあるが、高校生のそうした思いに触れることができたのはプロジェクトとしても貴重な経験であった。

## (3) 情報発信

### ①事業紹介パンフレット作成（パンフレット）

プロジェクトの取り組みを紹介するパンフレットを5,000部発行。主に県内文化施設や県立学校等に配布した。

### ②ホームページ作成（ホームページ）

独自ホームページの作成はできなかったが、事務局を置く福島県立博物館のHP上で適宜情報発信を実施した。

## 第7節 平成27年度行事

### 平成27年度講座・講演会等行事一覧

#### (1) 館長講座

『司馬遼太郎の東北紀行』①	赤坂憲雄	館長	4月16日(木)	150
『司馬遼太郎の東北紀行』②	赤坂憲雄	館長	5月21日(木)	148
『司馬遼太郎の東北紀行』③	赤坂憲雄	館長	6月18日(木)	130
『司馬遼太郎の東北紀行』④	赤坂憲雄	館長	7月16日(木)	138
『司馬遼太郎の東北紀行』⑤	赤坂憲雄	館長	8月20日(木)	124
『司馬遼太郎の東北紀行』⑥	赤坂憲雄	館長	9月17日(木)	123
『司馬遼太郎の東北紀行』⑦	赤坂憲雄	館長	10月15日(木)	135
『司馬遼太郎の東北紀行』⑧	赤坂憲雄	館長	11月19日(木)	116
『司馬遼太郎の東北紀行』⑨	赤坂憲雄	館長	12月17日(木)	101
『震災から5年を迎えて①』 「それでも、文化の力を信じてみたい」	赤坂憲雄 紺野美沙子	館長	1月21日(木)	155
『震災から5年を迎えて②』 トークセッション「震災画像・震災アーカイブの可能性」	赤坂憲雄 金澤文利	館長	2月18日(木)	110
『震災から5年を迎えて③』 シンポジウム「震災遺構を考えるー震災を伝えるためにー」	赤坂憲雄	館長	3月19日(土)	125

#### (2) 考古学講座

実技講座「土器作り1」	森 幸彦	学芸員	8月1日(土)	20
実技講座「土器作り2」	森 幸彦	学芸員	8月2日(日)	20
実技講座「土器の野焼き」	森 幸彦	学芸員	10月4日(日)	20
考古学講座「サロンド考古学」	荒木 隆	学芸員	1月24日(日)	16
考古学講座「サロンド考古学」	荒木 隆	学芸員	2月28日(日)	75
考古学講座「サロンド考古学」	荒木 隆	学芸員	3月27日(日)	60
考古学講座「流廃寺成立の背景」	荒木 隆	学芸員	11月29日(日)	13
考古学講座「勾玉・ガラス玉を作ろう」	高橋 満	学芸員	3月26日(土)	20

#### (3) 民俗講座

映像で見るふくしま伝承の技①「紙を漉く技術～ふくしまの手漉き和紙～」	大里正樹	学芸員	5月16日(土)	18
映像で見るふくしま伝承の技②「奥会津の曲げ物づくり」	内山大介	学芸員	7月11日(土)	14
映像で見るふくしま伝承の技③「ふくしまの炭焼き」	二瓶浩伸	学芸員	9月19日(土)	18
映像で見るふくしま伝承の技④「村のかじや～会津地方の野鍛冶の記録～」	大里正樹	学芸員	11月1日(土)	8
映像で見るふくしま伝承の技⑤「会津の和ろうそくづくり」	内山大介	学芸員	1月23日(土)	18

#### (4) 歴史講座

面白資料で読む歴史①「江戸時代の絵暦に挑戦！」	阿部綾子	学芸員	6月13日(土)	23
面白資料で読む歴史②「180年前の東北の旅」	高橋 充	学芸員	6月20日(土)	22
面白資料で読む歴史③「1923ー大正12年の世相ー」	田中伸一	学芸員	8月22日(土)	11

面白資料で読む歴史④「考物（かんがえもの）に挑戦 —明治時代の子ども脳トレ—	佐藤洋一	学芸員	8月29日(土)	20
---	------	-----	----------	----

(5) 自然史講座

野外講座「化石をさがそう」	相田 優他3名	学芸員	9月26日(土)	31
実技講座「化石標本をつくろう」	竹谷陽二郎他3名	学芸員	9月27日(日)	17
野外講座「鶴ヶ城の野鳥」	古川裕司	野鳥研究家	11月15日(日)	12

(6) 保存科学講座

高校生向けの保存科学	杉崎佐保恵	学芸員	3月12日(土)	1
------------	-------	-----	----------	---

(7) ギャラリートーク

解説会「展示資料からみる古代のふくしま」①	荒木 隆	学芸員	4月12日(火)	20
解説会「展示資料からみる古代のふくしま」②	荒木 隆	学芸員	5月10日(土)	9
解説会「展示資料からみる古代のふくしま」③	荒木 隆	学芸員	6月14日(日)	6
解説会「展示資料からみる古代のふくしま」④	荒木 隆	学芸員	7月12日(日)	15
解説会「展示資料からみる古代のふくしま」⑤	荒木 隆	学芸員	8月9日(日)	19
解説会「展示資料からみる古代のふくしま」⑥	荒木 隆	学芸員	9月13日(日)	10
解説会「展示資料からみる古代のふくしま」⑦	荒木 隆	学芸員	10月11日(日)	20
解説会「展示資料からみる古代のふくしま」⑧	荒木 隆	学芸員	11月8日(日)	10
解説会「展示資料からみる古代のふくしま」⑨	荒木 隆	学芸員	12月13日(日)	7
解説会「展示資料からみる古代のふくしま」⑩	荒木 隆	学芸員	1月10日(日)	8
解説会「展示資料からみる古代のふくしま」⑪	荒木 隆	学芸員	2月21日(日)	5
解説会「展示資料からみる古代のふくしま」⑫	荒木 隆	学芸員	3月13日(日)	9

(8) 指導者向け研修

博物館利用指導者研修会	田中伸一ほか	学芸員	7月31日(金)	11
-------------	--------	-----	----------	----

(9) 実技講座

「小旗をつくろう」	大野青峯 大野久子	伝統技術保持者	5月5日(火・祝)	20
会津・三島の編み組み細工「ヒロロの小物入れ作り」1	角田キイ子 海老名一子	伝統技術保持者	7月11日(土)	21
会津・三島の編み組み細工「ヒロロの小物入れ作り」2	角田キイ子 海老名一子	伝統技術保持者	7月12日(日)	21
「縄文時代の編み物を再現しよう！」	本間一恵	バスケットリー作家	1月1日(日)	15
博物館だより読者モデル 時代衣装撮影会		学習支援班	2月27日(土)	5

(10) 実演

「大堀相馬焼の絵付け」	半谷みどり	大堀相馬焼窯元 休閒窯	6月21日(土)	13
「昔語り」	横山幸子	語り部	9月12日(土)	30
紙芝居「スーパー古事記」①	荒木 隆	学芸員	4月26日(日)	18
紙芝居「スーパー古事記」②	荒木 隆	学芸員	5月24日(日)	20
紙芝居「スーパー古事記」③	荒木 隆	学芸員	6月28日(日)	18
紙芝居「スーパー古事記」④	荒木 隆	学芸員	7月26日(日)	22
紙芝居「スーパー古事記」⑤	荒木 隆	学芸員	8月23日(日)	20

紙芝居「スーパー古事記」⑥	荒木 隆	学芸員	9月27日(日)	31
紙芝居「スーパー古事記」⑦	荒木 隆	学芸員	10月25日(日)	10
紙芝居「スーパー古事記」⑧	荒木 隆	学芸員	11月22日(日)	15

(11) 企画展関連行事(記念講演・シンポジウム・講座・展示解説会等)

企画展講座「壁画古墳の模型を作ろう」①	荒木隆	当館学芸員	4月25日(土)	8
企画展「ふるさと会津の人と四季ー福島県立美術館名品展ー」ギャラリートーク	早川博明	福島県立美術館長	5月2日(土)	45
企画展「ふるさと会津の人と四季ー福島県立美術館名品展ー」ギャラリートーク	坂本篤史 白木ゆう美	福島県立美術館学芸員	5月16日(土)	53
企画展講座「壁画古墳の模型を作ろう」②	荒木隆	当館学芸員	5月23日(土)	6
企画展講座「壁画古墳の模型を作ろう」③	荒木隆	当館学芸員	5月30日(土)	5
企画展イベント「公開対談 喜多方美術倶楽部をめぐって」	後藤 學 増淵鏡子	喜多方市美術館長 福島県立美術館学芸員	6月6日(土)	53
企画展「ふるさと会津の人と四季ー福島県立美術館名品展ー」ギャラリートーク	堀 宣雄	福島県立美術館学芸員	6月21日(日)	42
企画展記念講演会「ふくしま復興調査元年ー阪神淡路大震災と東日本大震災ー」	山本 誠	兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財課長	7月25日(土)	40
企画展「被災地からの考古学1ー福島県浜通り地方の原始・古代」展示解説会	荒木 隆	当館学芸員	7月25日(土)	20
企画展記念講演会「復興調査最前線1ー派遣職員が見たふくしまの遺跡ー」	荒木 隆	当館学芸員	8月8日(土)	53
企画展記念講演会「浜通り地方から福島県の古代を読み解く1」	荒木 隆	当館学芸員	8月15日(土)	33
企画展記念講演会「復興調査最前線2ー浜通り地方市町村教育委員会の調査ー」	木幡成雄 荒 淑史	いわき市教育文化事業団 南相馬市教育委員会	9月5日(土)	39
企画展「相馬中村藩の人びと」展示解説会	高橋 充	当館学芸員	10月10日(土)	40
企画展記念講演会「相馬中村藩の成立と家格形成」	岡田清一	東北福祉大学教授	10月17日(土)	58
企画展関連講座「御料理方に学ぶ!江戸の料理作法ー折形を折ってみようー」	平出美穂子	食文化研究家	10月31日(土)	15
企画展「相馬中村藩の人びと」展示解説会	高橋 充	当館学芸員	11月7日(土)	15
企画展「相馬中村藩の人びと」展示解説会	高橋 充	当館学芸員	11月14日(土)	4
企画展「相馬中村藩の人びと」展示解説会	高橋 充	当館学芸員	11月21日(土)	25
企画展「相馬中村藩の人びと」展示解説会	高橋 充	当館学芸員	11月28日(土)	16
特集展「震災遺産を考えるーガレキから我歴へー」展示解説会	震災遺産保全プロジェクト担当学芸員	当館学芸員	2月11日(木・祝)	12
特集展「震災遺産を考えるーガレキから我歴へー」展示解説会	震災遺産保全プロジェクト担当学芸員	当館学芸員	2月14日(日)	20
特集展「震災遺産を考えるーガレキから我歴へー」展示解説会	震災遺産保全プロジェクト担当学芸員	当館学芸員	2月21日(日)	35

	芸員			
特集展「震災遺産を考えるーガレキから我歴へー」展示解説会	震災遺産保全プロジェクト担当学芸員	当館学芸員	2月28日(日)	9
特集展「震災遺産を考えるーガレキから我歴へー」展示解説会	震災遺産保全プロジェクト担当学芸員	当館学芸員	3月6日(日)	19
特集展「震災遺産を考えるーガレキから我歴へー」展示解説会	震災遺産保全プロジェクト担当学芸員	当館学芸員	3月13日(日)	24
特集展「震災遺産を考えるーガレキから我歴へー」展示解説会	震災遺産保全プロジェクト担当学芸員	当館学芸員	3月20日(日)	18
特集展「震災遺産を考えるーガレキから我歴へー」展示解説会	震災遺産保全プロジェクト担当学芸員	当館学芸員	3月21日(月・祝)	27

#### (12) ミュージアムイベント

玄如節と会津の民謡		玄如節顕彰会	6月27日(土)	85
夏休み子ども映画会「アナと雪の女王」		シネマエール東北	7月20日(月・祝)	50
会津磐梯山・市民盆踊り		会津磐梯山盆踊り保存会	8月15日(土)	315
夏休みナイトミュージアム	各分野学芸員	学芸員	8月22日(土)	80
ハワイアンinけんぱく		モハル・ハワイアンズ	9月20日(日)	178
おはなしのへや2015inけんぱく		読み聞かせグループ「おはなしのへや」	10月24日(土)	25
クリスマス!クラシックアンサンブルコンサート		会津室内楽団Coderanni	12月19日(日)	244

#### (13) 共催事業

森のはこ舟アートプロジェクトフォーラム	森のはこ舟アートプロジェクト(県文化振興課)	川延安直 小林めぐみ	5月16日(土)	85
移動展「見る・さわる 世界の化石」展示解説会	三春町歴史民俗資料館	相田 優 他1名	7月18日(土)	35
移動展関連講座「化石標本をつくろう」	三春町歴史民俗資料館	相田 優 他3名	7月25日(土)	34
移動展「被災地からの考古学inいわき」記念講演会「浜通り地方から福島県の古代を読み解く」	いわき市考古資料館	荒木 隆	10月10日(土)	39
移動展「被災地からの考古学inいわき」関連事業 中央大学学術講演会「東日本	中央大学学部文学部教授	小林謙一	10月24日(土)	95

大震災と考古学」				
移動展「被災地からの考古学inいわき」 記念講演会 「復興調査から見てきた いわき地方の歴史」	いわき市考古資料館	木幡成雄	12月5日(土)	45
移動展「藤井康文 恐竜イラスト原画展」	福島県立図書館	自然分野	12月4日(金)～1 月6日(水)	1015
移動展「被災地からの考古学in南相馬」 記念講演会 「浜通り地方から福島県の 古代を読み解く」	南相馬市博物館	荒木 隆	1月30日(土)	75
移動展「被災地からの考古学in南相馬」 記念講演会 「シリーズ浜通りの地方の 製鉄を考える」	日本古代生産鋳鉄生産研 究会	吉田秀亨	2月6日(土)	30
移動展「被災地からの考古学in南相馬」 記念講演会 「復興調査から見てきた 南相馬地方の歴史」	南相馬市教育委員会文化 課	荒 淑人	2月27日(土)	20
復興応援パートナー事業 「3.11ふくし ま復興への想いを込めて2016from会津」	福島県会津地方振興局	学習支援班	3月5日(土)	864

#### (14) 後援事業

福島県造形サークル連合大会講演会	阿部宏行	北海道教育大学教授	8月1日(土)	70
シンポジウム「国立自然史博物館をふ くしまに！」	西 弘嗣	東北大学総合学術博物館	9月3日(木)	51
玄如節顕彰碑建立15周年記念事業 「玄如節 再興・再考・最高！」		玄如節顕彰会	10月23日(金)	85
会津史学会歴史文化講演会 「会津と相馬を行き交った人々」	高橋 充	当館学芸員	10月25日(日)	66
会津史談会公開文化講座「縄文人の愛 と死」	森 幸彦	当館学芸員	11月26日(木)	101
会津若松市教育委員会主催 「会津大 塚山古墳出土品講演会」	塚本敏史	元興寺文化財研究所	12月12日(土)	173
会津民俗研究会公開講座「廃村の民俗 ー東山湯の入りの生活を語るー」	佐々木長生 滝沢洋之	会津民俗研究会	12月23日(水・祝)	108

#### (15) 企画展・特集展内覧会（友の会）

写真展「東北ー風土・人・暮らし」	美術	川延安直	4月18日(金)	65
企画展「ふるさと会津の人と四季」	美術	川延安直	5月1日(金)	65
企画展「被災地からの考古学1」	考古	荒木 隆	7月17日(金)	43
企画展「相馬中村藩の人びと」	歴史	高橋 充	10月9日(金)	60

#### 平成27年度講座・講演会等の回数と参加者数

(1) 館長講座	12	1,555
(2) 考古学講座	8	244
(3) 民俗講座	5	76
(4) 歴史講座	4	76
(5) 自然史講座	3	60

(6) 保存科学講座	1	1
(7) ギャラリートーク	12	138
(8) 指導者向け研修	1	11
(9) 実技講座	4	82
(10) 実演	10	197
(11) 企画展関連行事（記念講演・シンポジウム・講座・展示解説会等）	27	734
(12) ミュージアムイベント	7	977
(13) 共催事業	11	2,337
(14) 後援事業	7	654
(15) 企画展・特集展内覧会（友の会）	3	168
計	115	7,310

